

---

# ReCruz-リクルス-

瀬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

R e C r u z - リクルス -

### 【Zコード】

N5107V

### 【作者名】

瀬

### 【あらすじ】

只今ストーリー修正中。

## 登場人物＆用語紹介

何時もの朝。

ベットの上で寝ていた少女は薄暗い部屋に光が差し込むのを感じる。小さな崖の上にあるここハノラの街は、崖の上と崖の側面上部が街として利用されている。

これは崖の下に住む獣たちと異種族から身を守る一つの工夫だ。そのせいか比較的友好な関係にある種族でさえも、貿易と移住以外では顔を合わせない。

少女は何時ものように頭の中でカウントダウンを始める。

いち、に、さんっ！

と、起きるのが日課になっていた。

さんっ！

と頭の中で言い、少女はむくつと起き上がりて何気なく右手を支えにした。

すると、右手に生温かく湿ったシーツが触れた。

少女は悪い夢でも見たのかと思いながら、右手の先を振り向いて見つめる。

そして少女は思わず掛け布団を引き剥がし、ベットの傍に立ちあがつた。

ベットの上に広がっていたのは異様な量の血。

その中央には、全身を血で覆ったような少年。

そして、少年の右手はしつかりと一つの剣を握っていた。

その剣は血に濡れることなく、冷たく温かい灰色を少女に見せた。

「これで良い

呼ばれて来た少女はそう言って、布の先端を結ぶ。

血止め用の薬草と布切れを使った簡単な応急処置だったが、今でき

る事はそれで精一杯だった。

その精一杯を超えてやれる事と言えば、栄養の整つた食事をするくらいだ。

「ありがと」

少女がそう言ひと、もう一人の少女は治療の為に一度回収した剣の方に振り向く。

そして、必死に思い出そうとしながら言ひ。

「それより…この剣何処かで…」

「えつ？ エオ、この人の知ってるの？」

エオと呼ばれた少女は首を少し傾げながら答える。

「剣の方は確かに見覚えがある。男の方は…微妙って所」

知つていると言えば嘘になる。

だが、知らないと言つても嘘になる気がした。

「で、シェルンは昨日この男と何やつたの？」

「だ、だから知らないつて！」

ふつと鼻で笑いながら少女は寝室から出て行く。

シェルンと呼ばれた少女もそれを追うように部屋から出た。

「じゃあ突然現れた。とでも？」

「だつて…この街にあんな傷のまま来る人なんていないし、街に住んでる人なら顔くらいならしつてるし…」

階段を降り、2人はそのまま歩いて家から出て行く。

「じゃあね、シェルン。もし何かあつたら南の防衛基地に来て。今

日担当だから」

「うん。ありがとね」

そう言つて少女は軽く左腕を上げ、手を振りながら街中に消えていった。

ドアを開けて監視塔の中に入ると、早速何時ものメンバー3人が數字を言い合ながら木の実を貪つていた。

「じゃあ、2684」

一人の少年がそう言つと、別の少年が振り向きながらこう答えた。

「2ショットの1ヒットだな。ようエオ、カルクなら何時ものとこだぞ」

カルクとは同じ街に住む少年の事で、少女と同じ防衛隊員だ。

少女がカルクに好意を持っている事は本人以外の誰もが知っている事で、何時ものようにこの会話は流された。

そして少女は少年たちのそばにあつた椅子に座り、木の実を一つ手に取る。

「何かあつた?」

少女がそう言つて木の実を頬張ると一人の少年がこう答える。

「3097。何にもないさ。何時も通り」

「そう」

少女はそうして安全を確認してから、次の解答者側のメモを手に取つた。

「1ショット1ヒット」

「ははーん。次で勝てるぞ」

どうやら次の解答で数当てゲームの決着がつくらしい。

解答者側は早速唸りだしながら少女の持つたメモを覗きこんだ。

「エオ、分かるか?」

「おいおい、協力なしだろ?」

そう言つられて少女はメモをテーブルの上に置き、また木の実を取つた。

「13週目つて、2人とも馬鹿まっじぐら」

### 3の始まり… 1 (??・??・??・??・??・??・??)

サアアア……

風が吹き、草が揺れる。

「んつ……」

寝起きの体を起こすのは誰でも辛い。

目を殆ど閉じたまま起き上がる、右手に持った杖で地面を刺しながら立ちあがつた。

左手で後ろ髪や背中を払い、首だけ動かして辺りを見渡す。少し先に街が見えた。

その反対方向には広大な草原。

寝起きの少年イスは、その草原の入り口に居た。

杖をふと地面から抜いてみると、それが杖でない事に気付く。

灰色の剣。

それは剣先から柄に何本か線が入つてあることに加え、握り手部分にある指の前まで刃が伸びていた。

刃の中央付近には横に入る線も見れる。

コアーネン……

文字では表せそうにない鳴き声。

それは、空から聞こえた。

地面を蹴つて後ろに素早く移動すると、その剣を目の前で構える。獲物を捕え損ねた嘴は、地面を軽く噛んでから空に浮かんだ。

翼を羽ばたかせ、嘴を再び向ける。

すると、上着がカチャカチャと音を立てながら揺れた。

よく見ると、上着のあちらこちらに金属が付いており、それが音を立てている。

そしてそれは、自分の物ではなかつた。

剣はとても斬れそうな形状ではない上に、金属を使つていないので異様に軽い。

だが、武器と呼べるものはそれくらいしかない。

覚悟を決め、武器の刃を右下に移動させる。

足から頭までの高さは自分の身長の1・5倍ほど。

右翼の先から左翼の先までは身長の3倍ほど。

大きさでは明らかに負けている。

そして突如、翼が向きを変えた。

それを見逃さなかつたイスはサッと右に避け、直後に繰り出された大きな嘴を回避。

刃を大鳥の翼に走らせると、翼がサクッと斬れた。

異様な切れ味。

とは言つても普通の剣ほど。

形状のせいでの切れ味が異様に見えてしまう。

大鳥は叫び声のような鳴き声を上げながら距離を取り、攻撃のタイミングを再び窺う。

両手で構えていた剣から左手を離し、今度は右手だけで右下に構える。

翼を何度も羽ばたかせ、距離を多めに取つた大鳥は、ふと上がつてから翼を大きく広げた。

そしてかなり緩い斜度で降下しながら嘴が目の前に迫つてくる。

当たる直前で右に避けると、大鳥は両足を地面に付けて180度回転した。

その瞬間を逃さず、イスは目の前にあつた大鳥の胴体に刃を突き刺した。

下から刺された刃は骨を貫通し、背中で灰色の刃を光らせる。

身体が力を失つて倒れる前に刃を抜くと、後ろに3歩進んだ。

ドサッと音を立てながら大鳥が倒れると、暴れもがく大鳥の頭に刃を突き刺す。

静まり返つた空気の中、刃を抜くとその刃に血が全く付いていない事に直ぐ気付いた。

だが、大鳥からは血が溢れ出している。

水と油のような物なのだろうと勝手に結論付け、街の方に振り向いた。

「あつ……」

声を上げたのは1人の少女。

肩に当たるか当たらないかぐらいの金髪で、背はイスよりも一〇〇cmと少しほど低い。

上着は恐らくその少女の物だろうと思い、イスはゆっくりと近づき始めた。

そして、その少女の後ろから走ってくる男女をさりげなく確認し、少女の目の前に立つと口を開く。

「お前の上着か？」

「あつ……うん」

少女は既に薄めの上着を着ている。

イスは一度街にでも戻つて取つて来たのだろうと思い、上着に手を伸ばした。

「じゃあ返す」

「い、いこよ。かさ張るだけだし」

少女は両手を出し、そつ言いながら別れの挨拶でもするかのようこの手を振る。

抵抗感が少しあつたが、善意は受け取つておこなつて上着から手を離した。

「シェルン。その人？」

後から来た少年がそつ言つと、「クツヒシェルン」という少女は頷く。

「全然元気そうだけど……」

後ろの大鳥を見ながら少年がそつ言つと、少し遅れてから来た少女が言つた。

「寝ただけじゃない？」

確かにそれが一番説明を付けやすい。

だが、イスにはそこで寝ていた記憶などなかった。

起きたらそこだつたというだけ。

「でも、ここつてモンスターが出るし…」

それについてはさつきの大鳥が良い例だつた。

加えて、よく遠くを見れば数十体ほどは確認できる。

「とりあえず1つ良いか?」

何時までも議論を続けそうな3人にそう言ひつと、イスは若干の間を置いてから言つた。

「ここは何処だ?」

「…」

「…」

「…」

「…」

呆氣を取られたよつな顔の3人。

当然かと思いながらイスが返答を待つていると、

ダアアアアン…

街の方から爆発音が聞こえた。

3人の顔は同時に街に向けられ、2人は直ぐに走り出す。

残つた1人にイスは思わず言つた。

「鈍間」

そして直ぐに駆けだすと、シェルンと呼ばれた少女が声を張りながら言つ。

「の、のろまつて!」

そう言つてから駆けだすと、4人は一直線に街に向かつて行つた。

3の始まり…2（イス・シェルン・????・?????・?????・?????）

街は湖のど真ん中に浮いていた。

け。

大きな鼠返しのような形だった。

その街と？がつてているのは数本の橋のみ。

その金でモンスターで覆いつぶされていた。  
そして、そのミスターの声には人間。

つまり、人間同士の争いだ。

モンスターは単なる武器でしかない。

「これじゃお街は帰れないな」

2人がそう言うと、シェルンは少し間を置いてから「そうだね」と

力なく言つた。

街の口では既に華麗が起きていた  
三人がその場に座り入らうとしている所で、あくまで第三者の立場

から言った。

## 「この原因は？」

「阿波舞」の歴史

後付けの質問を聞くと、3人は回答に躊躇つた。

だが、場の空気は動かない。

「フイジタ一族を知らないの？」

「馬鹿。誰でもそれくらいは知ってる。こいつが他種族でない限り」

でも、口の辺でこの言葉を使うのは僕たちくらいだし……

勿論、それに付き合つ氣のないイスは早速いつ言った。

「見たところ、橋は占領されてるが数は多くない。攻め側は本気じやないな」

話題転換。

誤魔化しつつ自然に話を流しに入つたのだ。

「ああ。毎日来るから」

少年がそう言うと、シェルンが補足説明に入る。

「死人は出ないけど、酷い嫌がらせだよ。返して欲しいなら普通に来たらいいのに」

「返して？何を？」

その補足説明には少年が入つた。

「フインター族の女の子だよ。怪我してのを助けたら、次の日いきなり攻撃してきて…無理矢理返そうとしたら女の子は嫌がるし…」イスはそれを聞いて、「じゃあ会つてみるか」と心の中で呟いた。

それとほぼ同時にモンスターの群れが踵を返して逃げ出す。どうやら奪還行動でも侵略行動でもない嫌がらせが終わつたようだ、家中から人が溢れ出していくのが見えた。

「じゃあ案内してくれ。暇つぶしがてら会つてみたい」

「別にいいけど…何処の人なの？」

誤魔化せてなかつたらしい。

イスは仕方なくこう言つた。

「ラウラリーズ。頭でも打つたみたいだから気にするな」

長い廊下を延々と進むと、シェルンが1つの部屋を指差した。その部屋の戸を開けて中に入ると、1人の少女が顔をこちらに向ける。

「あなたがフインターの女の子…か」

「えつ？…何故言葉を…」

しつかり話が通じている。

勿論、イスが特別な言葉を使っている訳ではない。

「通じる件に関して質問しても良いか？」

「えつ？」

今度の疑問符はシェルンのもの。

部屋の外に居たシェルンは頭だけ部屋の中に突っ込む。

「そんなはずは…」

「フィンター、名前は？」

「えつ…えつ？」

戸惑うのも無理はない。

突然言葉が分かる奴が来たら誰だつて戸惑う。

ただ、今は少し状況が違った。

「ほんとだ…通じる」

「だろ」つと言いかけた時、突如耳を劈くような音が街中に響いた。

ビービーと鳴り響く警報音。

イスは「本日2度目だな」と、特に警戒もせずに思つた。

「二、これって！」

「フィンターか？」

温度差のある2人を後日に、フィンターが突如窓の方に両手を突き出した。

それと同時に「違う！」とシェルンが叫ぶ。

直後、窓ガラスの壁を破り、黒と銀の塊がなだれ込んできた。

「効かない！？」

フィンターの少女が何か対抗策を打つたらしが、失敗したようだつた。

勿論そんな事に構う気はないイスは、大鳥を斬つた剣を握り直す。

「フィンター。とりあえず今は協力しておけよ

タツタツと一步踏み出すと、田の前に居た塊を横切りして上下に分断させる。

そのままフィンターのそばに入ると、刃を田の前で構えて威嚇し、塊たちの動きを止める。

「何やつた？」

「えつ？」

「おでてを広げて何をやつてたんだ？ってこと」

小さな剣を持ったシェルンもフィンターのそばに入る。

「ま、魔法を…」

「効かない……って言つたな。実力勝負か…」

「魔力も実力でしょ！」

シェルンはそう突つ込みながら田の前に飛んできた塊を斬り飛ばす。致命傷は与えられなかつたが、塊の身体から青白い光が溢れ出し始めた。

「機械か？」

「ほんとに何にも知らないの？」「いつら海向こうの怪物だよー。」

勿論イスはそんな怪物の事は知らない。

目の前に飛んできた $50\text{ cm}$ ほどの塊を左右に両断すると、会話を続けた。

「どう見ても機械だろ」「機械か？」

「だから機械の怪物！！」

イスはとりあえず「人工知能のついた戦闘兵器」として頭の中で片づけた。

「とりあえず敵だな。魔力が効かないのは異常だが…」

「今まで通用してた。フィンターの子の勘違いじゃ？」

「そ、そんなことは…」

急に立場が弱くなつたフィンターを気にして、イスは刃に、自分の体に、力を込めた。

そして、飛び込んできた機械に刃を振り下ろす。

カンッ…

機械は先ほどのシェルンが斬つた塊と同様に、自らの配線を剥き出しにして部屋の片隅に飛んだ。

だが、まだ生きている。

何も思わず斬り裂いた1体目とはその点が違っていた。

魔力を込めて振った刃では死なない。

「確かに。魔力有りじゃ堅いな」

「それホント?」

疑うシェルンに「やつてみれば良いだろ」と言い、イスは残る機械に悠々と近づいて斬り裂いた。

そして、窓際に立つて足元に広がる光景を見つめる。

「酷いな……」

目視で確認できるもので、一番大きいのは2階建ての家屋ほど。数は雨粒ほど。

シェルンやフインターも窓際に立ち、その光景を見つめる。

「おい、シェルンさん。さっきの男女ペアは放つておいていいのか?」

「あ!」

唚然としていたシェルンは突然踵を返して駆け出す。  
居る場所や助ける方法は考へていないだろうと判断したイスは、直ぐに追おうと踵を返したが、その足を止めた。

「フィンター、お前はどうするんだ?」

「……魔法が使えないなら役立たず同然」

「フィンターは魔術特化なのか?面倒だな」

「……」

黙り込むフィンターに向かつて、イスは溜息を吐いてから言った。

トリガーを引く度に鉄くずが出来上がる。

だがそれと同時に肩の痛みが増す。

「カルク。これじゃあキリが無い」

目の前に迫つていた2体を切り裂き、カルクと呼ばれた少年は言った。

「だからって引く訳にはいかないよ。弾はまだある?」

「十分」

「十分?十分だつて?」

明らかに場に合わない声。

しかも、それは機械共の中から聞こえた。

「何処のどいつだあ?俺様を馬鹿にしてんのは?」

急に制止した機械の中から、1人の男が出てきた。

体中に金属を巻きつけ、手には2つの銃口が付いたライフルを持っている。

「なあんだ、ガキどもじゃねえか。まとめて逝きなあああ!...」

突然向けられた銃口に2人はすぐさま反応して避ける。

放たれた2本の光り輝く線は、2人の後方にあつた家屋に穴を開け、人の2倍ほどある機械を吹き飛ばした。

「つち。弾がねえのに外しちまつたあ。まあ、ガキなら普通の弾丸で十分だよなあ!!」

バリケードに隠れていなかつた少年は、すぐさま立ちあがつて走り出す。

直後、ダダダダダダッと弾丸が放たれ、地面が土を噴いた。

バリケードに飛び込むと、少年は自分の右太ももを押さえ始める。服は既に赤く染まり、地面上には血が流れ落ちていた。

「カルク。援護するから逃げて」

カクツと頷くと、少年はバリケードの端に身を寄せ、数十メートル先の門を見つめた。

門の先は防衛区画。

逃げ切れれば何とかなる。

「無理はしないで少しづつ」

「分かつたつ」

流れ続ける血を必死で押さえながら走る準備をすると、少女がバリケードから飛び出した。

ダダダダダダンッ

一発目の薬莢が落ちる前に続けて5発の弾丸を放つと、少年がバリケードから飛び出て走り出す。

ダダダダダダダンッ

照準を合わせずに放つた弾丸は当然の如く外れるが、金属だらけの男の動きは確実に封じられていた。

「弾切れ！」

言つたと同時に少年は別のバリケードに隠れる。少女もバリケードに隠れると、マガジンをすぐさま交換してまた飛び出した。

「つ！」

弾丸を放とうと照準を合わせる。

だが、合わせれなかつた。

「あめえんだよお嬢ちゃんよおおお…！」

額と首に向けられた銃口。

見開いた目は黒目が円に見えるほど開いており、その中には恐怖以外何もなかつた。

撃たれれば確実に死ぬ距離。

口径を大きさからして、頭は首から外れるかもしれない。

外れなかつたとしても、頭蓋骨は確実に割れ、一瞬である世に行くことになる。

僅か18歳ほどの命が、今、絶たれようとしていた。

ダツダンッ：

「きやああああああああ！」

右胸と腹部を撃ち抜いた弾丸は地面に突き刺さり、土煙を上げた。

トリガーを押している最中に、射線がズレた。砲身に弾丸がぶつかつた。

「何い？」

銃身を上げると、門の向こうに立つライフルに銃口を向けた。

「誰だあ？俺様の装備品に傷を付ける奴は？」

「ショルン逃げて！」

少年がそう言つとハッと我に返り、門の影に走る。

「逃がすかよお！！」

門の陰までは約20m。

門から伸びる一直線の道のど真ん中で撃つたのが間違いだった。

男とシェルンの間に壁を挟むには、死角が狭過ぎた。

シェルンが駆けだして5歩目。

当然、丸見えだった。

ダンッ…

思わず目をつぶつた。

だが、叫び声が聞こえる訳でもなく、辺りは静寂に包まれていた。

「へつへつへつ…面白いじゃねえか」

その静寂を破り、男はそう言つた。

弾丸は…

「…………んつ」

弾丸は、宙で止まった。

男の目の前に立つ少女によつて。

「シールドを使うとはなあ…テメー何者だ？」

「…………んつあ…くつ」

少女は突如跪く。

体中に開いた穴のせいで。

機械共にやられたものだった。

「何だ。ぼろぼろじやねえか…」

ニヤニヤと笑いながらそう言つと、男は一歩一歩と少女に近づいた。

額に銃口を当て、ふつとその額を押すと、少女は仰向けに倒れる。

再び銃口を額に当てると、男は言つた。

「楽にしてほしいか？どうだあ？」

妙な、妙な気配を感じた。

刃を縦横無尽に振り、迫る機械をなぎ倒しながらシェルンを探す。

だが、街中を探しても見つける事は出来なかつた。

残るは西側の居住区。

イスはこれほどまでに自分の運を恨んだ事はなかつた。

焦る足を抑えつつ、後ろを気にしながら目の前の機械を切り裂く。

後ろに居るのは勿論フィンター。

息切れを起こしながら何とか付いてくるだけだが、イスは特に拒絶したりしない。

ダダダダダダンッ……

妙な銃声。

それは、向かつてゐる方から聞こえた。

ダダダダダダダダンッ……

続けて聞こえた。

明らかにおかしい。

イスは後ろを向いて言う。

「フィンター。ラストスパートだ」

返事は無いが、待つてゐる暇はない。

迫りくる大型の大型機械の右足を切ると、イスは目の前の3体に迫つた。

その3体はほぼ同時に腕を上げ、手に付いた刃を振り下ろす態勢に入る。

だが、その射程に入る前に刃を振り、6本の足を全て切り落とした。

「つ！…消費が大きいな」

魔力で刃の先に光り輝く刃を作つた。

だが、魔力の消費が大き過ぎ、イスは一瞬目の前が眩んだ。

魔力が効きにくい事を考慮して多めに使つたが、それ以外に何か要素があるようと思えた。

休みたいと願う足を無理に起こし、再び走り出す。

ダッダンッ……

また聞こえた。

だが、目の前にあるのは機械の山。

焦りが増すだけだった。

「つち…」

「ま、待つて」

遅れてついて来たフインターがそう言つと、息を切らしながら身体を90度に曲げ、頭だけ上げて言つた。

「と、飛んだら…んつ…良いんじやない?」

「…いや、妙に魔力消費が多い。飛ぶのは不可能だ」

「えつ?…大丈夫だよ…」

膝を掴んでいた手を離し、イスの肩を掴む。

そしてその直後、フインターの背中に翼が現れた。

「ま、魔力には自信あるから」

魔力の消費がやはり大きいのか、少女は辛そつだ。

「無理するな」

「大丈夫…」

翼はあくまで飛行の補助。飛ぶには別の力が必要だ。

だが、それを考慮しても少女は余裕に見えた。

「何処まで…」

「あの機械共の先まで良い

ダンッ…

まだ。

「無理はするな。潰れたら意味がない」

「大丈夫だつて……」

ふつと身体が持ち上がった。

何かに足を押されたみたいに。

その勢いがあるうちに肩を掴んでいた手が腹に巻きつくと、一気に空へ舞い上がる。

そして、横揺れもせずに前に進みだした。

「ビビる気力さえねえってか？」

当てた銃口を押し、少女を地面に押し付ける。

「まあいい。あのガキと共に送つてやらあ」

ライフルの銃口をふつと空に向けると、後ろで黙つていた機械が動き出した。

その先頭を歩くのは両腕にカプセルのような兵器を持つた機械。

それが花弁のように3つに分かれ、2人にどんどんと近づいていく。

「シェルン！」

「今投げる！」

シェルンは走りながら槍投げの槍のようにライフルを投げる。

チャンスと言えるチャンスは今くらいしかなかつた。

今を逃せば、仲間を、親友を、救える機会は無い。

「おつと、忘れてた」

男がそう言つた頃にはライフルが既に宙に浮いていた。

それをキヤッチしたカルクはバリケードから上半身を出し、トリガーホールを引く。

それを支援する形でシェルンも背負つっていたライフルを構えてトリガーを引いた。

ダダダダダダンッ…

重なる銃声。

だが、それを受けたのは、

「つち！これじゃあ！」

機械。

弾を浴びせた機械はその場に倒れ込むが、他の機械によつて直ぐに見えなくなつてしまつ。

2人は機械たちの中に呑み込まれつた。

カルクとシェルンは銃口を向けたまま歯を食いしばる。

その時だつた。

ダンッ…

その銃声は、シェルンでもカルクでも機械共でもなかつた。

そして、その銃声を上げた弾丸は、男の左肩に刺さつた。

「いってえなあ…。2人とも」

6本の刃が、腕から出てくる。

持つていたライフルは地面に落ちた。

そして、その刃は、2人の目の中で光る。

「落とせフィンター！」

「2人とも死ねやああああああああああああああ…！」

間に合わない。

目の前にある。

だが、間に合わない。

振り下ろされる両腕に…間に合わない。

腕から生える刃に…間に合わない。

イスは宙で、三本の刃が胸に刺さるのを見た。

直後、甲高い音が木靈する。

3本と1本の刃が交差し、血を流した。

「また別かあ…。お前は手ごわいんだろおなあ！」

男が邪魔だつた。

目の前に居る仲間に、恋人に、そして家族に、手が届かない。

「邪魔だ退け！」

刃を離すと、後ろから振り下ろされた機械の腕を避け、男の6本の刃に振り下ろした。

だが、甲高い音を立てるだけで、どちらも崩れない。

「テメエが邪魔なんだよおおおーー！」

男が左腕だけを後ろに下げるが、イスは危険を顧みず残つた右腕の刃を力押しした。

だが、間に合わず、男の3本の刃がど真ん中を捉える。

直後、生ぬるい感触が走つた。

最も大事な人の血が滴る刃で、イスは  
そして、

そして、食われた。

花弁によつて

「何い！？」

イスの身体から刃を抜くと、男はすぐさま距離を取つた。

灰色の刃は青色に変わり、纏うようにその色の光を帯びていた。

逃げるよ、は二人を食った機械が空は上からで行く見逃さなかつた。

「うおおおおおおおおおお！」  
刃を大きく振り上げると、自然と青い光が剣先に集まり、自ら刃を伸ばし始めた。

伸はし始めた

だが、その刃は縦には振られず、斜め上に水平に振られた。

そこに居た機械共は弾け飛び、家屋に突っ込んだ。

2人を食つた機械の先。

そこに居た

## 水色の巨大な機械。

窓際で見た機械並みの大きさ。

だが、違つた。

何かが違つた。

イスは唇を噛み、噛み千切りそつになるくらい噛み、その機械を睨んだ。

「へっ、御迎えか。あばよおおー・ガキども！」

男はそう言つて人の倍ほどの機械に飛びつく。  
2人を食つた機械同様にその機械が空に昇つて行くと、他の機械共も続いた。

イスは、ただ睨んだ。

水色の機械を。

フィンターは屋根の上に降りると、身体を少し反らせて大きく息をする。

身体を前に出すのと同時に、口から勢いよく吸つた空氣を吐き出すと、街の外にまで聞こえそうな甲高い音が響いた。

既に機械共は点になり、目の前に居るのは水色の機械だけとなつていた。

バサバサと音を立てながら緑色の光を所々に纏つた大きな白い鳥が屋根の上に降りると、フィンターが傍によつて頬を撫でた。  
そして、水色の機械を指差す。

すると白い鳥は飛びあがり、水色の機械にぐんぐんと近づき始めた。直後、水色の機械は逃げるようになに舞い上がる。

数秒後、1つは空に消え、数十秒後、もう1つも空に消えた。  
刃は何時の間にか灰色に戻り、イスは屋根の上から下りてこようとするフィンターを見た途端、俯いた。

### 3の始まり… 3（イス・シェルン・カルク・????）

フィンターの右手が傷口をなぞる。

身体の中から刺されるような痛みが上半身を覆うが、イスは顔色1つ変えなかつた。

ただ、斜め上の天井を眺めるだけだつた。

機械共を撃退した後、無傷の者は負傷者の手當てに負われた。勿論無傷の者は数えるほどしかおらず、シェルンやフィンターは休む間もなく動いていた。

そんな時だつた。

街に嫌がらせをしていたフィンターが塩を持ってきたのは、正確には別のフィンターだが、街の人からしてみれば同じだつた。そのフィンターのおかげで一応休む間くらいは取れるようになつた2人は、イスとカルクに付きつ切りだつた。

2人とも、いや4人とも同じ境遇だつた。

「あ、あの…」

天井を向いたまま、イスは答えた。

「何だ？」

「後は追つてます……それだけです」

白い鳥。

それはフィンターの少女の守り鳥だつた。

フィンターは一人前の証として1羽の鳥を自分の下部とする。それを守り鳥と呼んでいる。

だが、その鳥は守るのではなく、救うのでもなく、復讐の鳥と化そうとしていた。

2人の状態、行き先、男の言葉。

その全てが「死」の一文字を表していた。

希望を持ったところで、絶望が増すだけだつた。

「なあ」

イスは、手を離して少し離れた所で隣に座ろうとしていたフインターにそう言つた。

「あいつと……ノルンとどういう関係だつたんだ？」

イスの中で家族以上の存在と化していたノルン。

彼女は、数年前に突如消え、既に死んだと思われていた。

だが、シェルンやカルクの話によると、その数年前から少し経つた辺りからここに住んでいた。

そして、数ヶ月前からここに居るフインターの世話係をしていた。イスはそれを、もう一度訊かずにはいられなかつた。

「……食事の世話とか、色々」

言葉は通じないが、2人は常にと言つていいほど一緒に過ごし、周りからは姉妹のように見られてた。

と、シェルンは言つていた。

そんな話を聞く度に、イスは喜びと同時に悲しみに襲われた。生きていたのに…救えなかつた。

ふつと壁に寄りかかっていた身体を起こすと、イスは突然立ち上がつた。

「あと1時間。それで落ち着かせる」

イスが部屋を出ていくと、フィンスターが思わず言つた。

「大丈夫かな…？」

「えつ…？」

「えつ？」

焼けた2階に出ると、イスは斜めに割れた壁を伝つて屋根の上に出た。

街の中心部にあるこの家屋は、土台が高いおかげで街を一望できる。この家屋はついさっきまでフィンスターが居た家屋だ。屋根の一番高い所に登り、立つたまま空を見上げる。夕焼けが沈み始め、もうじき夜が来る。

持っていた灰色の剣を置き、イスは空を見上げたままその場に座つた。

復讐に駆られる気持ちを必死に抑えようとしていた。  
今すぐ動いても何もならない。

そう言い聞かせて。

「嫌！止めて！」

屋根に登つてから30秒ほどしか経つていなかつた。  
イスは剣を再び握り、立ち上がる。

屋根の端まで歩いていくと、そこから下を覗き込んだ。

「王女様！言う事を聞いて下さー！」

「嫌！嫌！！」

救援に来たフインターの1人がフインターの少女の右手を引っ張つていた。

周囲には他のフインターも大勢いる。

「止めてあげて！嫌がってるでしょ！」

フインターの背にそう語りかけたのはシェルンだった。  
だが、誰一人振り向きもしない。

「約束だつたではありませんかーこの街の住民を救う事で王国に帰  
られるとー！」

「嫌！嫌！」

少女の力で大人に勝てる訳は無く、どんどんと街の門にフイン  
ターたちは近づいて行つた。

イスは屋根を蹴つて飛び上ると、直ぐそばにあつた屋根の上に飛  
び降りる。

続けて別の屋根の上に飛びと、それを繰り返してフインターたちを  
追い越した。

そして、ある程度追い越したところで屋根の上から下りる。

「邪魔だ退け！」

先頭を歩いていたフインターが錫杖を振り上げ、それをイスに向か  
つて振り下ろした。

手が反射的に動き、その錫杖の頭を切り落とす。

「き、貴様！」

当然の如く後ろに居た2人が前に出て、錫杖の頭をイスに向かた。

「逃げて！」

その声が聞こえた時には既に術が放たれており、イスは地面に吸いつけられるように跪く。

「つち、魔力馬鹿はやりたい放題だな」

「何だとお！」

錫杖がまた振り上げられ、イスの頭の上に叩き落とされようとしていた。

しかし、振り下ろされると同時に手が動き、また頭を切り落とした。予想外といった表情を浮かべるフインスターたちの手と足が止まると、刃が首に迫る。

寸前で止まると、数人のフインスターが錫杖を構えた。

イスはそのフインスターを目を一人ずつ合わせると、こう言った。

「お互い落ち着く必要があるんじゃないのか？」

「ならその剣を捨てて下さい」

少女を引つ張つていたフインスターがそう言つと、イスは直ぐに返す。

「そつちが先だ。手を離せ」

直後、少女が手を上下に振つて男の手を無理やり離させた。それと同時にイスは刃を首から離して地面に突き刺す。

フインスターたちが距離を取ると、少女を掴んでいたフインスターが言った。

「この方は我らの王女であられる。無用な手出しは控えて頂きたい」

イスは心の中で「運ぶのは逆か」と呟く。

そして、少女に問い合わせるように言った。

「その割には随分と嫌がつてたが？」

「…王国には戻りたくありません。… あそこには私の王位継承に反対する人が大勢います」

少女の方を向いてフインスターが言つ。

「誤解です。たとえそのような事がありましても、我々がお守り申し上げます」

「嫌です。信用できません」

「だろうな」と心の中で言いながら、イスは2人の会話の中に入った。

「悪いがその他王女様は復讐の手掛かりを握つてゐる。王女様も嫌がられてるんだから、置いていってくれないか? 繙承反対ってことは別の候補者くらい居るだろ?」

「そうはいかない。ミリア王女には王位継承をしてもらい、祖先の力を受け継いでもらわなければならぬ。第一、反対する者などいない」

初めて少女の名前を知つたイスは、早速こう言つた。

「じゃあ居ると仮定して、ミリアの敵を倒して王位継承を済ませれば良いんだな」

「貴様失礼だぞ!」

黙つていたフインターが錫杖を振り上げながらそう言つ。

振り下ろされると同時にイスは刃を抜こうと力を込めたが、錫杖は一言で止まつた。

「止めて!」

ミリアがそう言つと、フインターはそくそくと後ろに下がる。

「どうも」

と礼を言つてから、イスは続けた。

「ミリアは王位継承自体には賛成なのか?」

「それは…父上の意思を継ぐうと思つてゐるから…」

「なら、俺が王位継承に反対する奴らを痛めつけてやる。それで、復讐の情報を貰う。これでどっちも解決だろ」

別にここに留めて情報だけ聞いても良かつた。

だが、今持つている剣の情報、機械たちの情報が欲しかつたイスはあえて王国に乗りこんでみようと思つたのだ。

「だからそのような者は居ない」

「はいはい。だつたら護衛という名目でいいだろ？」

「護衛は我々だけで十分だ。他種族の介入は認められない」

「それは王女様が決めるんじやないか？」

強気だつたフインターは王女という言葉に反応して急に静まった。

一応それなりの権限はあるようだ。

「でも、あなたが…」

「鳥が帰つてくるまでこいつらを追い払つ氣はない。それに、お前だつて力があつた方が楽にできると思わないか？それとも、もう赤の他人か？」

黙つていられない。

復讐は果たす。

遠まわしにそう言った。

「……彼に護衛を頼みます。問題は無いはずです」

つこさつきまで強引に連れ帰ろうとしていたフインターが言つ。

「…分かりました。では準備を」

遠回りの一歩目だった。

イスは準備をする物が無く、直ぐにも行ける状態だつたが時間を貰つた。

2人が一緒に行く事になつたからだ。

勿論拒む理由はない。

「そういえば、さつき急に言葉が分からなくなつたの

「え？」

先に準備を済ませたシェルンがそう切り出した。

「でも、何時の間にか分かるようになつて…もしかして何か不思議な力を持つてたり？」

「知らないな」

イスはそう答へつつ、この剣が原因なのではないかと思い始めた。

断定はできないが、突然変色や巨大化が現に起きているのだから、否定もできない。

「そんな事より、本当に良いのか？王女様が護衛に不安を持つくらいの勢力が背後に居るんだから、確実に危険だ。ここで待っていても別に良いんだが…」

「私たちだって同じ気持ち。絶対無人兵を殺す。全部若干俯きながらそう言つと、シェルンは急に笑顔を取り戻して続けた。

「何でね！ そんなことができる訳ないよね！」

直後、ガチャとドアが開き、カルクがこう言いながら部屋の中から出てきた。

「ごめん。遅くなつた」

「いくぞ。王女様が御待ちだ。…………無人兵か…」

街の外に出ると、既にフィンターが自身の守り鳥を呼び集め、出発の準備を済ませていた。

王国までは飛んで行くらしい。

「ミリア王女、こちらの守り鳥を」

守り鳥が居ないミリアの為に青色の羽毛の守り鳥が用意されていた。

「御三方は我々の守り鳥に1人ずつお乗りください」

守り鳥の扱いにはフィンターが必須らしい。

流石に3人、4人も乗れる訳が無く、イス達は仕方なく別々の鳥に乗ろうと動き始めた。

「あ、あの」

そう言つて3人を止めると、王女様は指先をイスに向けてこう言つた。

「空で襲われないとは限りませんので…」

確かにそうだと思いつつ、イスは名乗つてなかつた事に気付く。

そこで、早速自己紹介を始めた。

「イスだ」

それに続いて、2人も自己紹介を始める。

「あつ、ショルンです」

「僕はカルクです」

妙に距離感のある言葉でそう言つと、王女様は改めて自己紹介をする。

「アダマスト王国の王女ミリアです。宜しくお願ひします」

斜め45度の礼をすると2人は釣られるように礼をするが、イスは特に返しもせずに王女様用の守り鳥に近づいた。

護衛のフィンスターたちはそんなイスを睨みつつ、ショルンとカルクが守り鳥に乗つたのを確認して指示を出す。

直後、王女様用の守り鳥以外が空に舞い上がり、北の空に走つて行つた。

「守る気あるのか？」

「どうでしょ……？」

ミリアが鳥に乗ると、イスはその後ろに乗つた。

そして、王女様を自分と同じ身分の人間として扱うかのように二つ言つた。

「じゃ、飛ぶ方は任せた」

「はい」

そう言つた瞬間、守り鳥がバタバタと羽ばたきながら走りだし、2人は遅れて空に飛び上がる。

日は山の後ろに隠れようとしている所だった。

### 3の始まり… 4（イス・シェルン・カルク・ミリア・？？？・？？）

「なあ、無人兵とか言う奴の事は知ってるか？」

既に日は沈み、シェルンとカルクはフィンターに身を預けて夢の中に入っている。

加えて殆どのフィンターも明日に備えて眠りに入っていた。

起きているのは護衛のリーダーとミリア、イスくらいだった。

「ええ。それなりに…」

「じゃあ色々と教えてくれ」

「はい」

無人兵の事はただの戦闘兵器ぐらいとしか知らなかつたイスは、小さな情報でも欲しかつた。

ミリアはそれを察したのか、無人兵の兵装や名称は抜きにして言い始めた。

「無人兵は私たちフィンターがこの世界に来た頃から現れたと聞いています。初めは今の無人兵のように捕食行為が無く、ただただ人殺しをする道具として使われていたそうです。ただ、捕食行為と言つても、実際は人殺しと殆ど変わりが無いですけど…。無人兵は機械族と私たちが呼んでいる種族が操つている兵器です。出所は不明で、その数の多さに殆どの種族が圧倒されています。現に私たちフインター族も多大な被害を受けています。機械族の居場所は複数あり、一つのコロニーに住む機械族は約5人と聞いています」

「5人？」

思わずそう突っ込んでしまつた。

あまりにも少な過ぎる。

「はい。無人兵が何もかもやってくれるので、指示役さえ居れば良いのです…。最悪一人でも巨大なコロニーを稼働させます」

つまり、100人の機械族が居れば100の部隊が作れるという事だ。

それを聞いて、イスはふと疑問が浮かんだ。

単純だが、重要な疑問を。

「じゃあ復讐の為に機械族全員を滅ぼすのは間違つてるのか？」

「……無人兵を持っている機械族を滅ぼすのは間違つていないと思います。1人が100人を殺すのなら、1人を殺すのが私の中での考えです」

「そうか…続けてくれ」

ミリアの中には101人生かすという考え方もあった。

だが、それはあまりにも浅はかな考え方だとい最近実感した。

そして、機械族は滅ぼさなければならないと今考えている。

「無人兵を操つてゐる機械族は元々普通の人間だったと聞いています。始まりは永遠の命を求めた人間が自身を改造したとか、発達しそうた機械が人間保護の為に始めたとか色々あります。けど、それが本当かは今のところ分かつていません。機械族が私たちを襲う理由も定かではありませんから」

根本の一つ先は分かり始めている。

だが、根本は分からない。

そんなところだった。

「じゃあ話題を変えて王位継承の問題について教えてくれるか？」

「はい」

何故ミリアが力を引き継がなければならぬのか。

何故反対派が居るのか。

教えてほしいのはそんなところだった。

「普通、王位を継ぐのは子孫の中の兄です。でも、私の父上の子孫には私と女のセリアしか居ませんでした。そこで、セリアが王位を継ぐことになつたんです。セリアは父上と母上の本当の子でしたから」

「…じゃあお前は血がつながつてない？」

「はい。私は捨てられた子で、父上が養子として育してくれましたつまり、今からしようとしている計画は本当の子にしてみれば腹立

たしい事。

反対派が出てもおかしくは無い。

「じゃあ何で継ぐ必要がある。力がどうとか言つてたが」  
イスがそう訊くと、ミリアはこう言った。

「王位継承と共に継がれる力。それは祖の魔力と言われています。その魔力は資格が無い者は決して扱う事が出来ない魔力と言われていて、王家の血を引いていなければ扱えないとされています。でも、私は扱う事が出来ました。それも、血を引いているセリアよりも…」  
扱える者を王位に就かせるか、血を引いている者を王位に就かせる。  
そういう問題だ。

「それが原因で王位継承に問題が起きてしまい、私が力を継いで機械族に対抗する派と、今まで通り血を継ぐ者が継いで対抗する派に分かれてしましました。私はセリアとの仲を崩したくなかったので、直ぐに身を引いたんですけど…」

問題はそう単純に解決はしなかった。

「どんどん私は一人になっていきました。私はそれが嫌で逃げたんです。でも、一部のフィンターが独断で私を追つてきて…」

独断だつた為に嫌がらせのような形になつた。

もし正式に暗殺部隊などが居れば大変な事になつただろうと、イスは心の中で思つ。

「じゃあ、反対派の数はどれくらいなんだ？」

「私の憶測ですけど、父上に賛同して下さつている方々は約国民全体の半数。母上とセリアに賛同していらっしゃる方々も半数だと思いますので、2500人ほどだと思います」

半分というのはどちらに転がつても危険があるという事だ。

イスは単純にミリアに王位を継承させるだけでは無理だと感じつつ、こう質問した。

「他の種族について何か知つてるか？」

「それは…あまり…交流は殆ど無いような状態です。言葉が通じない。機械族のような種族が居る。そういうたた状況下のせいだと思

「います……」

ミリアは特例ということだ。

「そうでなければ殺されているか王国に戻っていたはずだ。

「そろそろ寝つてはどうですか？疲れてるんじや？」

「それはそのままそっちに返すよ。王女様が寝不足で倒れたら笑い話にもならないぞ」

「……寝てられません」

「確かに」

「おい、お嬢様！帰ってきたみたいだ」「ベランダに出ていた少年がそういうと、部屋の中で読書をしていた少女が本を閉じて立ち上がった。

「行くのか？」

「ミリアにも話を伝えておかなければならない」

部屋をそそくさと出ていく他称お嬢様を眺めながら、少年は言つ。

「はーあ。面倒だな」

バサバサと羽ばたき守り鳥が地面に降り立つと、フィンターたちが次々と降りていく。

それに続くように3人も守り鳥から降りると、守り鳥たちは再び羽ばたいて空に飛んでいった。

そして3人はミリアの直ぐ後ろを歩くような形で王都に入つて行く。王都は海のど真ん中にあった。

まるで機械族から身を守るかのように

少し歩くと、真正面から2人の少年少女が近づいて来た。

少女の方はミリアと同じくらいの歳、少年の方はイスと同じくらい

の年に見える。

「セリア……」

ミリアがそう言つとフィンターたちは次々と離れていく、ミリアを置いて王国の中央に入つて行く。

3人は足を止めたミリアに続いて足を止め、2人と向かい合つた。

「へえー。随分と可愛い子連れてんじやん」

少年が真つ先に口を開いてシェルンにそう言つと、シェルンは苦笑いをしながらカルクの方に身を寄せた。

「まあ、俺はもつと胸がある方が好みだけど」

「ちょー！」

思わずそう言つたシェルンは一步前に踏み出しが、シェルンが続きを言う前にイスが言つた。

「発達途中だからこのくらいで良いんじゃないかな？」

「ちょっとーー！」

2人に向かつてそう言つと、少年の方は笑いながら背を向けて言つ。「そうかもな。…」いつもはそう簡単に前を殺さないと思つぞ」「ライ」

少し強い口調でそう言つと、少年は「はいはい」と言つて来た道を戻つていつた。

その場に残つた少女は今度はミリアを見つめながら言つ。

「話がある。王宮に」

「はい」

そう答えて再び歩き出すと、少女がその隣を歩く。

2人は直ぐにその後を追い、1人は少し不満げな顔をしながら追つた。

王宮に入ると、通りかかるフィンターたちが軽く頭を下げるようになつた。

どうやら王宮の人間らしく、街中のフィンターとは少し格好が違い、

揃っている。

「父上が私たちに試練を与える。見事それを達した者が王位を継ぐ」少女は突如そう言つた。

既に確信に至つていた為、3人は特に突つ込みもせずに話を頭の中に入れた。

「はい」

ミリアはただそう言つて受け入れる。

王宮の中にあつた階段を上り始めると、少女は続きを話し始めた。

「その試練は無論護衛は無しだ。護衛の介入が疑われた場合、試練は即刻中止、それが真実ならば追放という事もあり得るだろ?」

「はい」

決意が込められた返事。

勿論、その試練で王位を得ても危険が減る訳ではないと分かっている。

「試練で死んだ場合はそれまでの奴だったという事だ」

「はい」

今度は悲しみが込められた返事。

それがどういう意味を持つかは本人しか知らない。

階段を上りきると、大扉の両脇に立つていたフィンスターがさらに横に立つていたフィンスターと目を合わせた。

すると、横に立つていたフィンスターがミリアたちに近寄り、両手を差し出してから言つ。

「武器を御預かり致します」

カルクとシェルンは持つていた武器をすぐさま預け、両脇に立つていたフィンスターが開けた大扉の向こうに進む2人を追う。

イスは少し迷つた後、渋々武器を渡して大扉の向こうに進んだ。大扉の中には先ほどの少年と国王らしい男、護衛が数人居るだけだった。

中央をどんどんと進んでいくと、部屋の中央付近に居た少年が数歩前に出て3人を止める。

「これより先は許可証が必要となりまーす」

少年は軽く笑いながらそう言つと、丁度真ん中に居たシェルンの横に入る為にカルクを横にスライドさせる。

その空いたスペースに入ると、少年は180度回転して王を見つめた。

シェルンは仕方なくイスの方に身を寄せ、少年と距離を取る。

2人が王の前に立ち、右膝を地面につけて両手を左膝につけると軽く頭を下げる。

「よく戻つたミリアよ。話はセリアから聞いておるか?」

「はい国王陛下」

「今まで通りで良い。セリアよ、怪我の方はもうよいか?」

「はい父上」

「そうか。では、」これより試練の内容を伝えるとしよう。2人とも彷徨島ぼうこうじまは知つておるな?」

「はい父上」「はい父上」

2人は同時にそう答える。

「その島行き、己の力を示す物を持つて参れ」

イスが馬鹿並みの抽象的表現だと思つていると、2人がまた答えた。

「はい父上」「はい父上」

それしか言えないのかと思つていると、国王陛下が2人の横を通り過ぎて4人に近づいて来た。

目の前まで来ると、シェルンとカルクは流石に恐縮に思つたのかミリアとセリアのように屈みだす。

しかし、イスと少年は微動だにしなかつた。

そんな2人を横目で見つめる護衛たち。

だが、国王陛下はそんな事を気にせず言つ。

「あー。君たちは我々の言葉が分かるか?」

突然、突然だつた。

何の前触れもなく言葉が分からなくなつた。

イスは直ぐにその原因を悟り、踵を返して歩き出す。

「イ、イス君！」

シェルンがそう言って止めようとする、隣で突っ立っていた少年が言った。

「あ？ 何語だそれ」

「あれ？」

シェルンは少年が同じ種族の人間だと思っていた為、思わずそう言う。

少年も同じように思つていたため、何が何だかサッパリわからなくなつた。

大扉から出たイスは持ち場に戻ろうとしている武器を預かつていたフィンターに駆け寄つて言つ。

「さつきの返してくれ」

「えつ？…分かりました」

フィンターはすぐさま来た道を戻り、駆け足のまま武器を持つて帰つてくる。

その中から灰色の剣だけを取り出し、大扉に近づいていくと両脇に居たフィンターが錫杖を手に取り大扉の前に立ちはだかつた。イスはその2人の目の前で立ち止まると、剣を床に置き、手で2人を押し退けながら大扉の中に入る。

「言葉通じるか？」

「あれ？ さつきまで発展途中の言葉が分からなかつたはず何だけどな」

「五月蠅い…」

軽く右手で拳を作りながらシェルンがそう言ったのに続けて、イスは国王陛下に向かつて言つ。

「あの剣のおかげです。国王さん」

力チャツと錫杖の頭が動いた。

だが、誰一人手を出そうとはしない。

「剣？… まあよい。御主らには世話をなつた。だが、これより先は

我らフィンターのみで解決させてもらつ。もて成しは」

「待つた」

イスは今度こそ手が出そうな行為を平気な顔でする。

国王陛下の言葉を止めたイスは続けて言ひ。

「国王さんの娘さんに用がある。もう一人の王女さんの話だと、死んでも自己責任みたいだが、こつちは死なれたら困る。直前で助けるのはありだな?」

「……申し訳ないがそれは無理だ。彷徨島に他種族の者を入れる事は出来ない」

「……なら、ここに必要じやない人間を皆殺しにしても良いんだぞ?」

恐らく、フィンターの頭の中にはイスを殺す為の術が用意されている。

それを予測しているにも関わらずイスは国王陛下の田の前まで歩き、

言つた。

「冗談だ。ライフルと鳥を用意してくれ。遠くから見るくらいなら良いだろ。反則があればその場でわかるだろ?」

「…………ミコアよ、よいか?」

それは、一発の弾丸で自分の運命が決まつても良いかといつ事だ。たとえそれが誤射だとしても。

「……はい、父上」

「セリアよ、御主もよいか?」

「はい父上」

「ならば用意致そう。ただし、御主が裏切り者の可能性は否定できません。この少年も同行させる」

そう言って田を向けられたのは、

「はいはい。じゃあ発展途中とその連れは御留守番だな

「五月蠅い……」

ダアン、ダアン、ダアン……

連続して放たれた3つの弾丸は的のど真ん中を射る。だが、その横的には一発も弾丸が当たっていなかつた。

「おめー今何した?」「

最初の3発が的にすら当たつていないので、次の3発が的に真ん中を射た事に疑問を感じたライは思わず問い合わせる。

「魔力による弾道修正」

「は? そんなことしたら馬鹿みたいに魔力を消費するだろ」「必要なのは1発だろ?」

「まーな。それより、その剣はどうするんだ? 僕とあんたが持つてたら、ペッタンの方は言葉が通じなくなるんだろう?」「……もういいや

諦めに入ったシェルンを後田に、イスは言った。

「剣は持つていく。残る方より必要だろ」

「……じゃ、俺は鳥の方に行ってるぞ。開会宣言なんて聞く気ないからな」

ライはそう言って海の方に歩いていく。

イスはライフルを背負うと、灰色の剣を手に取つた。

「行くか

「我が娘セリニアとミリアはこれより王位継承の試練を受けることとなる。皆さんも伝えていた通り、彷徨島に行き、己が力を示す物を持ちかえることとなるだろう」

恐らく国民全員が今現在集まっている。

国王陛下の脇には2人の娘が立ち、互いに遙か彼方の水平線を見つめている。

それを見上げていた国民たちは、思い思いに自分が指示する娘を言い合つ。

他人事のように。

「皆も知つておるだろうが、我が娘ミリアは異種族の子だ。無論、今日まで異種族の子が王位継承の候補に挙がつたことは無い。だがしかし、我が娘ミリアは祖なる魔力を扱う事が出来る。これが單なる偶然か、或いは奇跡か…それは定かではないが、皆の未来を考えるのならば、より力を持つ者が王位を継ぐべきである。我が娘たちは我より祖なる魔力を扱う事が出来る。故に、王位継承後に皆の暮らしに暗雲が立ち籠める事はない。皆、心配せず2人の帰りを待つてもらいたい」

イスは一瞬止んだ国王陛下の言葉の間にに入る。

「所詮一人じや何もできない。それっぽい奴が王位を継いでも何ら問題ないな」

「聞こえるよ」

シェルンはそう言つが、一番近い所に居るフィンターはただただ国王陛下を見つめるだけ。

3人の言葉を真面目に聞くほどフィンターたちは下賤ではなかつた。「では、これより2人には彷徨島に行つてもらう。皆、王都からは出づに帰りを待つてもらいたい」

国王陛下がそう言つて数歩下がると、2人も後ろに下がる。

続いて国民たちは一礼をしてから帰り始めた。

イスたちはタイミングの合わない礼をして、海の方に歩き始める。これがこの種族の儀式だった。

「反乱の起きるタイミングは何時だと思つ?」

「えつ?」

イスが突然そう言つと、シェルンが驚きの返事を直ぐに返し、それに続けるようにカルクが言つ。

「ミリア王女が王位継承をした時か、それになりそうになつた時かな?」

「……じゃあ何で俺は彷徨島に行く?」

単純に彷徨島内の危険を直前で排除する。だけではなかつた。

「じゃあ…」

シェルンがそう言つたのに続けて、イスは言つ。

「楽に殺すなら彷徨島内だ。隠蔽もそれなりにし易いだろ?」「だつたら僕たちも行けるように国王陛下に…」

イスはカルクの提案を首を振つて却下した。

「今からじや遅い。それに、あの場じや1人が限度だつた」

「僕たちは御留守番か…」

イスは軽く笑つてから続ける。

「これは俺の勘だから無視してもらつても良い。2人は国王さんのそばに居てくれ」

「何故ですか?」

カルクがそう訊くのも無理はないと思いつつ、イスは言つた。

「単純に反対してるだけじゃないと思ってな」

3人は居住区を抜けて海のそばに出る。

するとシェルンとカルクは徐々に歩調を遅め、立ち止まつた。イスはライが居る方にどんどんと歩いていく。

「じゃあ、言われた通り国王陛下の所に行つてみる?」

カルクがそう提案すると、シェルンは「うん」と言つて頷き、踵を

返した。

「多分」いつが俺たちの鳥を操縦してくれる奴だ」  
ライがそう言うと、1人の男が振り向く。

「御」一人が王女様方の護衛を務められる方ですね  
「実際は一人だけだ」

ライがそう言うと、フィンスターは首を傾げる。

「先ほどまで言葉が分からなかつたのですが…何故でしょ？」

「それはこの剣」

イスが灰色の剣を自分の目の前に持ってきて説明をしようとする、  
ライがそれを止めるかのように言つ。

「まあ、気にすんな。王女様の出発は何時だ？」

イスは自分の言葉が封じられているような気分になりながら、剣を  
持つた手を下げる。

そして、ライの質問にフィンスターが答えた。

「10分前後といった所でしょう」

するとライは腰に刺した鞘から長剣を取り出し、刃先をイスに向ける。

そして、言つた。

「軽く交えるか？」

それに対してイスは持っていた剣を動かさず、ただただ刃先  
を見つめる。

10秒ほどそれが続くと、諦めたのかライは刃をしまつ。

「そんなに怖い顔しなくてもなあ…。まあいい。何れお前の力が分  
かるだろうし」

ライがそう言うと、イスは少し間を置いてから言つ。

「お前、種族は？」

「俺？俺の事か？」

他に誰が居ると思いつつ、イスは返答を黙つて待つ。

「俺はラウラリーズだ。お前は？」

イスは少し驚きながらも直ぐに返す。

「俺もラウラリーズ。剣が無くても言葉が分かるみたいだな」

「じゃあ、あの空っぽの街に居た人間か？」

ライは当然「ああ」と返事が来ることを予想していた。

だが、直ぐには返らず戸惑う。

そして、イスは口を開いた。

「何だそれは？」

「…お前、本当にラウラリーズか？あの街に全員が集まつてると思つてたんだが……」

イスはライの言葉からラウラリーズの住む街があると予測する。そしてそれが空っぽだったことも。

「じゃあ俺は途中で落とされたんだな。おかげでの2人と一緒だ。言葉の方はこれの方で何とかなつたみたいだがな」

イスはそう言いながら剣先をライに向け、直ぐにそれを下ろす。

「そうか。じゃあ後で案内でもしてやるよ」

「時間があればな」

数分後、王女たちはきらびやかな衣装のまま守り鳥の居る街外れにやつてきた。護衛はおろか、観客もいない。

イスは若干疑問に思いつつ、守り鳥の背中に乗つた。ライもそれに続いて背中に乗る。

2人の王女もそれぞれの背中に乗ると、王女の守り鳥はふつと空に舞い上がった。

殆ど羽ばたきもせず、海に落ちていくかのように飛び上がった2匹の鳥たちは、横並びのまま海の向こうに飛んでいく。

イスとライが乗った鳥も飛び上ると、2人と距離を取るかのように空高く舞い上がった。

距離は既に人の形が判断しにくいほど離れている。

「おい。これじゃあ弾が当たらないぞ？」

ライがそう言つと、操縦者であるフィンターが前を向いたまま言つ。  
「彷徨島に到着する前に追いつきます。それに、国王陛下にあまり  
近づき過ぎないよう」と言われておりますので…」

「そう言つ事か」と心中で言い、イスは背負っていたライフルを  
手に取つた。

そして、スロー・アップを通して2人を確認し、田を離してから弾丸の確  
認を始める。

「撃つ気満々だな」

ライがそう言つと、イスは「ああ」とだけ返事をして弾を装填する。  
「じゃ、着いたら教えてくれ」

ライはそう言つて鳥の背中の上で横になつた。

数十分ほど飛んだ頃、イスは突然口を開いた。

「着いたぞ」

ライはまるで田を閉じていただけかのように直ぐに起き上がり、鳥  
の上から下を覗きこんだ。

2人の乗つていた守り鳥は既に島の上を旋回し始め、何時でも何処  
でも射撃ができるような体勢になつていた。

王女さまたちは島のそばに鳥を停め、今にも降りよつとしている。

「何事も起きらん事を祈るばかりだな…」

「そんな気持ちじゃ守れない」

「はいはい」

「ミコア、ここから先は何があつても手助けは致さん。そのつもり  
でな」

守り鳥から降りたセリアはそう言い、返事を待たずに木々の生い茂

る島の中に入つて行く。

ミリアは守り鳥の類を一度二度撫でてから、セリアの後を追つように島の中に入つて行つた。

「己が力…」

ミリアはそう呟きつつ、木々の間を通り抜けた。

島は全体が森のようになつており、見通しはかなり悪い。その為に突然モンスターに襲われる事もあると考え、ミリアは警戒しつつ一步一歩進んで行く。

それと同時に、己が力を示す物について考え始めた。

鳥の首か、或いは獣の首か。

どちらにしろ、戦いは避けられない踏んでいた。

どんどんと島の中に入つて行くと、一瞬空で何かが光つた。ふつと顔を上げてみると、守り鳥の翼が木の葉の間からちらりと見える。

「イスさんか…」と小さく呟き、ミリアは確認の為に止めた足を再び動かす。

「はあっ！」

錫杖の頭から放たれた水色の球体はモンスターの胴体に直撃。

悲鳴を上げるモンスターにさらに球体を放つと、モンスターは左にずれてそれを避け、右手の爪を振り上げた。

「凍てつく刃よ…」

錫杖を横にして両手で構えると、錫杖から青白い一線が飛び出してモンスターの胴体を切り裂く。

続いて茂みから現れたモンスターは両腕の爪を振り上げたまま飛びかかってきた。

セリアは慌てるよりも無く後ろに飛びながら口を動かす。

「留まり給え！」

モンスターの爪が地面に刺さった瞬間、モンスターはピクリとも動

かなくなる。

そして、セリアは錫杖をまるで槍を持つかのように構え、言った。

「出でよ！グングール！」

錫杖の頭から伸びた青白い光はモンスターの胴体を突き刺し、一瞬で息の根を止めた。

錫杖の端を地面に付け、「ふう」と息をつく。

祖なる魔力はミリアには劣っていた。

だが、誰もが持つ普通の魔力では誰から見ても勝っていた。  
勿論、負ける予定など一切ない。

セリアはこの島で一番の力を持つ獣の首を持ち帰り、父上に認めてもらおうと思っている。

そして同時に、王位継承で失った仲を取り戻そうと思っていた。  
自分が王位を継ぎ、何もかも背負って行こう。

そう心に決めていた。

「この辺りのはずだつたが…」

そう呟きながらセリアは歩みを進める。  
この島で一番と言われている獣。

それは先ほど殺した獣をそのまま大きくしたような人型の獣。

試練に挑んだ者や遊び半分で来た者が何人も死んだという話もある。  
試練の成功と退治を目的にセリアはそいつを探していた。

「居らぬな…」

そう呟いた瞬間。

祖なる魔力を使った時、ミリアは妙な胸騒ぎを感じた。

この力はそう簡単に使つていい物じゃないと言われるような胸騒ぎ。  
だからミリアはセリアに力を継いでほしくなかつた。

しかし、そんな曖昧な事で王位を取れる訳もなく、ミリアは勘違い  
だつたのではないかと思うようになつていた。

だが、イスの使う剣を見て籠っていた自分の心がまた動き始めた。力を消し去らないと。

そしてあの刃を止めないと。

イスの使う剣は祖なる魔力と同じような感じがしていた。

ただそれは限りなく弱く、刃が色を変えるまで全く分からなかつた。勿論それも勘違いかもしれない。

だからまだ止める事は出来ない。

ミリアはそんな思いを胸にしまいつつ、また進む。剣を止めるのも、力の消すのもまだ猶予はある。

もし王位を継げなかつたら、セリアに話して消してもうまい。

そして、剣は敵討ちの後に止めよう。

そんな事を思いながら歩いていると、ふつと先にある草が揺れた。

距離にして約10m。

高さは身を十分に隠せるほど。

ミリアは両手で錫杖を握り締めながらゆっくりと後ろに下がつて行く。

だが、草の間から出てきたそれを見て足は止まり、握り締めていた手は緩んだ。

「ううあ！」

木の幹に叩きつけられたセリアは錫杖を右手だけで構える。

「サモンドライゴン！」

セリアの両脇から突如蛇のような青白い光を持つ獣が飛び出し、モンスターに襲いかかる。

だが、横一線に振られた左腕でそれは消し去られ、モンスターはどんどんとセリアに近づく。

「雷の魂よ！」

今度はセリアの肩の横辺りに紫色に輝く球体が現れる。

そして、間を開けずにセリアは言った。

「轟け！」

球体は直後に一線の光となり、モンスターの胴体を貫く。たがそれはモンスターの足を一瞬止めただけで、時間稼ぎとも呼べるようなものではなかつた。

「出でよ！ グングニール！」

言つたとほぼ同時に錫杖を振ると、青白い光が槍となつてモンスターを貫く。

だがそれも時間稼ぎにすらならず、とうとう腕が振り下ろされた。だがモンスターの大爪が切り裂いたのは木の幹で、セリアは人間など簡単に潰せそうな手に掴まれてしまう。

「くつあつ！！」

モンスターにとつては1割にも満たないような力だったが、セリアは骨が碎かれそうになり悲鳴を上げる。

直後、術を使うときに読み上げる何時もの言葉を頭の中で言い、その術を放つた。

すると、セリア自身に炎が立ち上がり、モンスターの右手は炎に包まれる。

熱さのせいかモンスターが手を離すと、セリアは術を解除して直ぐにモンスターと距離を取つた。

服の上で燃える残り火を手で叩いて消すと、セリアは戸惑う気持ちを抑えて言う。

「紅の劫火よ」

錫杖を両手で握り、額に錫杖をつける。

「我が力を削り己を見せつけよ！」

直後錫杖の頭から炎が噴き出し、あつという間にモンスターを包み込んだ。

直ぐにモンスターの悲鳴が響き渡るが、セリアは術を止めずに悲鳴が止むのを待つ。

数秒ほど経つと、モンスターの悲鳴が止み、地が揺れた。

術を解除してその場に座りこむと、モンスターの頭を見つめ笑みを零す。

だがそんな自分が怖くなり、笑みは直ぐに消えた。

小さな黒色の猫に手を差し出すと、猫はミリアの腕を昇って右肩の上に立つ。

初めて見る獣だったが、ミリアは何故か警戒心を解いてそうしていた。

立ち上がり周囲を見渡すが、勿論誰もいない。

ミリアは一瞬、これを父上に見せて「獣を従わせる力」としようと思つたが、そんなのは通用しないと直ぐに気付き、また歩き始めた。父上が言つているのは友情や愛情、その他多種多様な力ではなく、戦う力である事は十分に理解していた。

だが、なかなか狩る気にはなれない。

自ら襲いかかる獣なら話は別だが、害のない獣など狩れない。

そう思つていたからだ。

加えて、害のある獣でもなるべく狩らないように今までしてきた。

勿論これからも続ける氣でいるミリアは、ふとセリアの勇敢さを思い出す。

決して逃げず、恐れを持たないセリアは何時も自分の事を守つてくれていた。

王宮の人間が捨て子の自分の噂をして、セリアは何時も変わらず接してくれていた。

そして、ミリアは王位継承の事を思い出す。

あの日から、セリアは急に変つてしまつた。

自分を何処かで拒絶するような態度を取り、話す回数が減り、今のようにになってしまった。

ミリアは、王位継承なんて無ければいい、早く終わってしまえばい

い。  
そう思い始めた。

獣の目玉を2つ持ったセリアは、守り鳥の上でほっと安心していた。ミリアの守り鳥はまだここに居る。

早い者勝ちではないが、早い方が有利だと想っていたセリアはこれで勝てると確信した。

守り鳥に飛び立つように頭の中で命令すると、守り鳥はふっと飛び上がり、海面に接しそうな高さで飛行を始めた。

頭を左に捻つて後ろを見ると、ライフルを構えた少年とライが見えた。

それでもまだミリアが無事である事を確認したセリアは、一刻も早く父上の下に行き、これ以上の成果は無い事を認めさせて迎えに行こうと決めた。

そして、昔のように話をしよう。

セリアの顔には獣を殺した時とは違う笑みが零れていた。

ダーン…

ダーン!!

一発の弾丸が木の葉を貫いて刃に当たる。

「おい！もつと近づける！」

ライがそう叫ぶと、フィンターは後ろを向くと同時に錫杖を水平に振った。

だが、それは直前で刃を取りだしたライによって防がれ、錫杖と刃がつながる。

ライは直ぐに錫杖を左手で握ると、それを左側に振つてフィンターを鳥の上から落とした。

だが、落ちたフィンターはすぐさま翼を作り出して飛び去つて行く。

「つか。逃がしたか」

「自分から落としておいて何を言ひ」

「つるせえ！それよりもつと近づかねえと…」

「ミリアに突如迫った刃。

それは、明らかに人によるものだつた。

イスはふつと立ち上がり、スコープから目を離す。

「試練どころじゃないな。降りて手助けしてくれる」

「この高さからか!? ラウラワーズならこの世界で魔力が使いにく  
い事は知ってるだろ!?

「議論してる場合ぢやない。もう一人は頼む」

そう言つて鳥から飛び降りると、イスは翼を作り出して飛行を安定  
させた。

ライはふつと後ろを向いてセリアを確認する。

そして、その向こうに居るものも確認した。

「おいおい、本気で言つてんのかよ…」

それは無数の守り鳥たち。

護衛ではない事は誰から見ても明らかだつた。

「さてさて、この鳥はどう

ライが言葉を言い終える前に鳥は突如身を波のように振り、ライ  
を振り落とした。

どうせ使えないと踏んでいたライは抵抗もせずに鳥から落ちぬと、  
先ほどのフィンター やイスのよう に翼を作り出す。

勿論、長くは持たない。

「島で籠城した方が良いんじゃないよおおー！」

翼を羽ばたかせると、あつといつ間に先ほどのフィンターを追い越  
し、セリアの真横についた。

それは守り鳥よりも早く、自力で飛ぶフィンターよりも余裕を感じ  
取れた。

「おいおい、お嬢様よおー！」

「ライ。先ほどの銃声は何だ？それにあの守り鳥は…」

勿論言葉は通じない。

ライはこの鳥じゃ追いつかれると考え、すばやく身をセリアに寄せて掴んだ。

直後、セリアの乗っていた守り鳥を追い越して海面すれすれを全速力で飛ぶ。

「ラ、ライ！ 何をする！？」

「黙つてろつて！」

ライはセリアから魔力を奪い、全速力で飛び続ける。

セリアは借りてきた猫のように大人しくなり、状況を理解しようとただただ辺りを見渡すだけだった。

だが、それは一瞬にして解かれた。

目の前の海面が飛び上がり、柱のように目の前に立ちはだかつた。ライは難なくそれを避けて進み続けるが、柱は瞬きをする間に2本3本と次々と増えていく。

「ラ、ライ！」

「ああ！ …くそ！ …着く前に死ぬぞ！ …」

ライはそう叫びながら身体を反転させ、セリアを掴んでいた両腕のうち右腕を離し、刃を握った。

セリアは両腕でしつかりとライの体を掴むと、首だけを後ろに向けてフィンターたちを睨む。

「手加減はせん！」

「ガキが調子に乗るな！ …」

1人のフィンターが錫杖を振ると、その頭から緑色の球体が数十飛び出し、一瞬で2人の目の前まで迫る。

ライはすぐさま回避の為に飛び上ると、フィンターたちに背を向けながら大きく宙返りをする。

「出でよ…ミヨツルニル！」

突如フィンターの頭上に雷光が走り出すと、一瞬にしてそこから海面まで雷光が走った。

守り鳥たちは次々と海面に落ちていく。

だが、フィンターたちは翼を作り出してすぐさま体勢を立て直す。

「そんな馬鹿みたいに魔力を使ってたら死ぬぞ？」

「忠告感謝致す」

「はいはい。どうせやり続けるんだろ！」

言葉の通じない2人は口調だけでそう会話すると、宙返りを終えて海面すれすれを再び走り始める。

その後ろをフィンターたちが追うと、ライはふつと振りかえって刃の腹を見せた。

「その距離じゃ避けねえぞ！」

腹から放たれた黄金に輝く球体は弾丸のように早く飛び、フィンターノーの一人に直撃する。

続けて放たれた球体もフィンターを確実に射り、警戒したフィンターノーは速度を落として防御の体勢に入った。

「御主は無理をするな」

「御注意どーも！」

刃を鞘に納めると、ライは再び全速力で王都に向かい始める。フィンターたちはただそれを眺めるだけだった。

ダーンダーン…

空から放たれた弾丸は威嚇にもならず、地に突き刺さる。

既に弾丸の為に魔力を使い切りそうになっていたイスは、焦りともどかしさを感じながらスロープから田を離した。

地面まであと数十メートルとなつたところで翼を大きく広げると、翼はパラシューートの代わりとなつて速力を落とし、イスは両足で地面に着地した。

だが、抑えきれなかつた速力がイスを押し返し、イスは身体を宙で回転させてから地面に背中を叩きつける。

妙に身体が重かつた。

イスは何時もならこれくらいの事で動きを止めたりはしないと思いつつ、力の入らない身体をただただ受け止める。

加えて魔力は最初にこの世界に来た時よりも減りが早いような気がした。

まるで自分が急激な老化に気付いていない感覚に襲われると、急に力が湧き出していく。

それは寝起きの感覚に似ていた。

イスは灰色の剣を杖の代わりにして起き上がり、ライフルをその場に捨てる。

今のは単に地面に衝突したときの衝撃が及ぼした事だ。

そう言い聞かせてイスはミリアが走つて行つた方に向かつて走り出した。

## A E … 8 (イス・リバリット)

「では、出身と種族をお願いします」

8人の男女に見つめられながら、リバリットは口を開く。

「A E の非人族です」

8人の疑問の矛先は、勿論、繋がれた手に向けられている。

「はい。……そちらの方は？」

フレアはそう言われてから少し間をおいて、こう言った。

「A E の非人です」

正直に言えるはずもなく、リバリットは黙つたまま艦長を見つめる。フレアも嘘がばれないように平然とただただ艦長を見つめる。

「……3つ良いですか？」

Wサインを作りながらさう言つと、リバリットが直ぐに答える。

「あ、はい」

「まず、休日のみの活動について説明をお願いできますか？」

普通ならそんなのはお断りなのだが、艦長はそんな雰囲気を漂わせずにはそう聞いた。

「えつと、彼女は平日、家の方の手伝いがあつて、僕は学校で授業があるので」

「学生なのでですか？」

流石に嘘は付けない。

駄目だつたらまた別の場所を探そうとリバリットは心に決め、「はい」と言つ。

「分かりました。では2つ目、フレアさんが魔術関係の仕事が無理なのはどうしてですか？」

あつさりと考え事は消え去り、リバリットはその質問の答えを探す。だが、それに答えたのはフレアだつた。

「魔力の放出量が生産量を上回つてゐる為」

魔力は自身の体内から自動的に放出される。

それを簡単にたとえるなら充電電池の放電だ。

放電代わりの魔力放出。

充電代わりの魔力生産。

普通、魔力生産を魔力放出が上回るなんて事は無い。

それを知りながらフレアはそう言つたのだった。

「珍しい」と、言うよりは、初めて聞きますね

「高等魔術の連続使用による副作用と言われた。今は他人から魔力の供給がないと生きていけない」

「そうですか」

魔力は未知の部分が無限にある。

それは、人間の想像力が無限であるのと同じだと言われている。

そういうた部分に嘘を隠せば、見つけ出すのは不可能だった。

リバリットはフレアの嘘の上手さに感心しながら3つ目の質問に身構える。

「では、最後です。何故手を？」

何だそんな事かと一瞬心の中で思つたが、追われてるから直ぐ逃げれるように、何ては言えない。

しかも魔力の移動はその時だけ繋げばいい為、それを理由にする事は出来ない。

不意打ちだった。

だが、その質問にもフレアは無表情のまま答える。

「不安だから。信頼できる人が居ないと私は死ぬから

それはもつともらしい答えだった。

何時でも魔力をくれる人がいなければ、死ぬ確率が出てくる。

それはどんなに低い確率でも回避しなければならない事だ。

「それはそうですね。では、次の休日から働いてもらいます

さっくり面接をパスしてしまった事に驚きを隠せないのか、リバリットは口を小さく開けて固まる。

対するフレアは無表情を崩さない。

「では、皆さんに自己紹介でもしてもらいましょうか

「待つてまたした！」と、言つようにもルランがジャンプし、両足でドンッと着地すると、フレアの目の前に立つ。

その跳躍力は翼があるせいか、艦の天井に頭を付けるほどあった。

「ねー。私が魔力をあげよっか？」「

その親切に対し、フレアはやはり無表情のまま答える。

「あなたが私の魔力を吸う可能性がある。だから断る」

道理に適っていることは誰にでも分かった。

だが、納得できないのかルランは引き下がらうとしない。

「私そんなことしないもん！」

「しただろ」

イスがポソリとそう呟くと、ルランは首で空を切るかのように勢いよく振り向き、イスを強く睨む。

それを見ていたリバリットは、立ちあがつてルランを立ち位置的に見下ろしながら言った。

「僕が中継になれば良いんじゃないかな？」

それに対し、フレアも立ちあがつて言つ。

「あなたに迷惑は掛けれない」

「でも、それじゃあ……」

関係を悪化させる種になる。

リバリットがそういう事を言おつとしている事に気付き、フレアは左手をリバリットから離した。

「少しでも悪戯をすれば、あなたを殺す」

フレアがそう言うと、それが本當だと感じ取りながらルランは魔力の移動を行い始める。

勿論、身体のどの部分にも触れずに。

本来、魔力移動は対象と術者が近くに居れば居るほど移動に掛る魔力が軽減される為、身体の一部を互いに接触させて行つ。

その為、それを不思議がる者は大勢いた。

艦長、イスの連れの2人、アンドロイド、新人2人がそれに該当する。

「あれ？」

ルランは何か思い違えたかのような表情を浮かべ、フレアを見つめた。

だがその表情は変わらず、警戒心丸出しの目が向けられているだけだった。

「だ、大丈夫？」

ルランは思わずそう言つた。

移動した魔力が既にルランの魔力全体の1割を通り越していたのだ。移動時の消費魔力を引き、普通の人間に換算すれば約5人分。心配してそう聞くのは当然のことだった。

その答えとして返つてきたのは、やはり無表情。

無理してるんじゃないかと思つたルランは、魔力移動を突然止める。

「ほ、ほんとに大丈夫？」

移動した魔力はルランの姉でもかなり危険な量だった。

身体に異常が出てもおかしくない。

だが、やはり返つてきたのは無表情。

そして、一言。

「有難う」

一体どんな身体をしてるのかと不思議に思つたが、触つて確かめる事は勿論の如くできない。

もしかしたら私よりもすごい魔力を持つていたのではないか、と心中で思いつつ、一步下がる。

本気が現実になるのではないかと思つたのだ。

「……い、いいよ、別に…」

姉はルランの何時も見れないビクビクとした動きに違和感を感じるとともに、睨むような強い目つきでフレアを見つめた。

「あいつ、確実に違う」

仲良くしないとか言つていた執事がイスにそつと、突つ込むのを我慢してこう返す。

「だろうな。まあ、探りはしないけどな」

2人だけの会話はそれだけで終わり、艦長が機を見計らつて口を開いた。

「では、自己紹介に入りましょ。まずお一人からどうぞ。」  
リバリットは軽く頷き、ルランと少し距離を取つて、全員を楽に見渡せる位置に立つてから言い始めた。

「リバリットです。先ほど紹介したように、A Eの非人族です。休日のみですが、宜しくお願ひします」

頭をササッと下げて自己紹介を済ませると、フレアが流れるように自己紹介を始める。

「フレアです。A Eの非人。よろしく」

それだけ言つと、サササッとリバリットに近づき、右手を左手で掴む。

「あはは」つと照れ隠しにリバリットが笑うと、姉が一步前に出た。  
そして、それなりに強気な口調で自己紹介を始める。

「セシリ亞よ。A Eの蝙蝠。適当によろしく」

それに続いて、執事が前に出る。

「レイだ。A Eの非人。同じく適当によろしく」

目つきは先ほどの姉のように強く、鋭かつた。

だが、それを気にする者は殆ど居らず、唯一ビクビクしてたのはアンドロイドだけだった。

1人を除く皆が性格上の癖だと、たつた一瞬で理解していたのだ。  
姉、執事と来て、次に来るのはおのずと決まってた。

「えつと、私はルラン。姉様と同じで蝙蝠。よろしくね！」

見た目で艦内最年少がそう言つと、イスがレイの後ろでそっぽを向いて言う。

「イスだ。A Eの非人。言つておくが家具じゃないぞ」

「女の尻に敷かれるけどな」

一体何処からそんな情報が出た、と突つ込みそうになるが、イスはわざとその言葉に沿つて返す。

「何も考えないで動けるのは、こそ樂だらうな」

「Mか…」

「おい」

2人の口喧嘩にペリオドを打つかのよつて、リースが一步前に出て言つ。

「リース。AEの非人。それなりに宜しく」

氣を逃さんとシーナが前に出て、艦長とアンドロイドが動いてない事を確認してから口を開いた。

「シーナよ。AEの小人。程よく宜しく。ちなみに子供じゃないから」

「そういうのが子供だ」

レイがイスの心の中に有つた言葉を代弁すると、シーナがムツとした表情で睨む。

ふんっと鼻で笑つて目線を逸らすと、今度は艦長に向かって。それに従うかのように艦長が自己紹介を始める。

「ルナです。AE出身で一応艦長をやっています。皆さんよろしくお願いします」

リバリットのように頭を下げるが、頭を起こしてから「では、アンドロイドさんどうぞ」と何気なく言つた。

それに驚いたのはリバリットだけで、他は予測済み、またはそうだったのか程度の反応だった。

アンドロイドはそんな全員の視線が集まるのを確認してから、自己紹介を始める。

誰も、艦長が種族を誤魔化した事に気付かずにだ。

「AE出身……と、いうか生産で、名前は……以前の主人の下では、お前とか尼、豚でした」

「ひ、酷い……」

そう言つたのはリバリットだけで、他はやはり予想済みだった。

修復しきれていない身体がそれを自然と物語つていたからだ。

「では、名前を考えましょ。リバリットさん、何か候補はありますか？」

突然白羽の矢が立つたリバリットは、思わず「ひっ」した。

「ほ、僕ですか？」

「そうです。僕です」

艦長がそう返すと、リバリットは困り顔を浮かべながら左手で頭を搔いた。

「名前を考えるのは得意」

左を向いたフレアにそう言わると、リバリットは「い、いや別に……」と言い、突如閃いた名前をボソリと言いついた。

「リズリットとかどうです」

「お前は妹にでもしようと思つてるのか」

一文字違うの名前を思わず言いつしまつたリバリットは、急に焦り出しおスに向かつて反論を始める。

「ち、違います！ たまたま思いついただけで……そんな意味じや……」

「まあ、是非はアンドロイドさんに決めて頂きましょう。どうです？」

艦長はリバリット作リズリットを拾い上げ、アンドロイドに差し出してみる。

すると、アンドロイドは周りの雰囲気を気にしたのか、イスと艦長、リバリットを順番に見つめ、答えを必死に決めようとした始めた。

怒鳴られ殴られないようにと焦りながら。

「そ、そ、それで良いです！」

「それで良い……か、どうでもいい感じだな」

レイがそういうと、リバリットは「確かに」と呟く。

それに気付いた仮リズリットはやはり慌てて言つた。

「『ごめんなさい！』これはその……言葉の綾で……悪氣は……」

昔ならこれで1時間の暴行は当たり前だつただりうと心の中で何人かが思いつつ、その中の一人が口を開いた。

「べ、別に気にしなくて良いよ。レイさんみたいに喧嘩口調じやないし」

「は、はい」

仮リズリストがそう言つたのとほぼ同時にレイが睨んだような眼をリバリットに向ける。

そして、リバリット曰く喧嘩口調でこう言つた。

「おい、随分ハツキリ言つたな。力量を考えろ」

「認めてんのかよ」

イスはそう言いながら背を向けて、陰でクスクスと笑う。レイがそう言つた直後にリバリットは謝り口を開くが、声が出る前にフレアが言つた。

「それはこちらの台詞。喧嘩を売るなら2人で買う」

レイはそれに対し、姿勢を全く崩さずに鼻で笑つてから返した。

「付き添いは役立たずか」

ふつと右手が水平に近づく。

だが、その半分でその手は止まった。

左手に伝わる圧迫感。

それが止めたのだ。

小さくフレアにだけ聞こえるような声で言つ。

「駄目だよ。簡単な感情操作だつて」

「……」

フレアはそれに対して無言の返答をした後に手を下ろし、レイに向かつて言つた。

「あなたにはそう見えるだけ」

「お前にはそいつが役に立つてるのか。まあ、喧嘩も買えないらしいから、仕方ないな。嘘つきと役立たずやん」

「理解してくれてありがとう」

そう言つと、レイは諦めたのか、それとも考へてゐるのか口を開かなくなつた。

今しかないと思つたリバリットは艦長の方を向いて帰りの挨拶をする。

「そろそろ帰ります。休日に来ますので、宜しくお願ひします」

「はい。…時間は9時からでお願いします」

「分かりました。では」

そう言つと、2人はその場から姿を消し、半ばレイから逃げるような形で会話がブツリと切れた。

艦長は話を戻す為に仮リズリットの方を向く。

「で、名前はリズリットでよろしいですか？」

首をカクッと傾けてそう聞くと、艦長の髪の毛がサラッと横に垂れる。

それに続けて、人工の髪の毛が2度波打つた。

「は、はい。お願ひします」

## A E … 9 (ノノレア・フラン)

「……っ」

寝ぼけていた身体に突如激痛が走る。

皮膚が引き裂かれるように痛い。

フランはそんな身体を無理矢理起っこし、半ば這いつぶつな形で木の幹に近づいた。

その幹と距離が無くなると、フランは背中を預ける。何故、私はここにいる。

そんな疑問が頭の中を横切り始めた。

ついさっきまで館を出た仲間と共に向かっていたはずだ。  
… 何処に？

新たな疑問が横切り始める。

「起きたか」

頭上3mほどの所から声がした。

低い男の声だ。

上を見上げると、黒く長いコートを着た男が、木の枝の上に屈んでいた。

「妖精語…だ、誰！？」

「そうか… そうだったな」

男はそう言ってからふつと前に蹴りだし、トッと地面の上に着地する。

そして、左手に持った双眼鏡を転送魔術で飛ばし、ふつと振りかえった。

「妖精語…ちょっと訳ありでお前を一回殺した。天国には行けたか？」

男は馬鹿にしたような笑みを浮かべながらいつぶつ。

フランはその顔に対しても恐怖より疑問が湧いた。

「妖精語…こ、殺したって…どうして？」

「妖精語：意外と冷静だな。まあ、その説明の前に治療しておく」

男は静かに歩み寄り、フランの胸の間に右手を当てる。

一瞬身を引いたが、後ろの幹が邪魔して下がれず、妙な恐怖感をフランは覚えた。

だが、その後に痛みが引いて行くのを感じて、恐怖が安心へと変わる。

治療をしながら、男は言った。

「妖精語：お前は煙たちに捧げる生贊になるところだった。そこで、俺が割り込んで存在を消し、生贊を回収したって訳だ」

「妖精語：生贊？ 何で？」

「妖精語：煙の正体は魔力の供給者がいない召喚体だ。自己を維持する為に魔力が必要だから、生身の人間を欲した。そこで、お前が選ばれた。お前は一族の中で最も魔力生産が多い妖精だから、選ばれたんだろうな」

何処に向かっていたか。

その疑問があつという間に解決した。

「妖精語：……あなたは誰？」

「妖精語：俺はノノレア。非人だ」

聞いた事が無い名だつた。

周辺に住む他種族と物々交換程度の交流はあつたが、その中にはいなかつたのだ。

「妖精語：さて、ある程度状況を理解してもらつたから、早速頼みごとに入る。お前は存在を消された訳だから、次の生贊が選ばれる。そこで、お前にもう一度生贊の役を買ってもらいたい」

フランは急に孤独を感じ始めた。

自覚が疑問に勝つたのだ。

顔が暗くなり、元気をどんどんと失っていく。

普通の反応だつた。

「妖精語：独り……」

「妖精語：ああ。……言つておくが、お前たちの一族は生贊を差し

出した後、煙を移動魔術で吹き飛ばす計画を練つていたぞ。勿論、お前のこと

「妖精語…えつ？」

男は手を離し、その手で首飾りを掴んだ。

その首飾りには、真つ赤な石が飾りとして付いている。

それを限界まで引き寄せ、フランの口に入るようになると、こう言った。

「妖精語：この魔石には移動魔術に反応する術が掛けられてる。少人数で吹き飛ばすには魔力が足らないからな」

パキッと石が割れ、小さな破片が2つ3つ地面の上に落ちる。

「妖精語：殺そうとした奴の記憶に残りたいか？」

「…………」

それが真実か嘘かなんてのは分からぬ。

この首飾りは確かに一族から貰つたものだが、魔力が入つてゐるかは不明。

一族が殺そうとした事実があつたかも不明。

何もかもがそれで片づけられてゐる。

だが、ノノレアの次の言葉で心は変わつた。

「妖精語：良いか、お前をもう一度生贊にすれば、煙たちとの交流が持てる。上手く行けば手を組む事だつて出来る。勿論、存在を消した事は悪いと思ってる。だが、そうするしか思いつかなかつた。それと……悪いが、俺はお前の事を良く知つてゐる」

良く知つてゐる。

フランは一族との生活を思い出してゐた。

毎日のように仲間と挨拶をする。

けれど、食事は何時も1人。

毎日のように仲間と仕事をする。

けれど、雑用ばかり。

そんな思い出は自ずとノノレアの言葉を確信に近付けた。

何時、捨てられてもおかしくなかつた。

フランは昨日の事を思い出していた。

そして、仲間が無事で喜んだ私を笑顔出迎えてくれた一族は、全て生贊が生きていた事に喜んだだけだったのかもしれないと思い始める。

それが、今まで自分に嘘についてきた事を認める事になつたとしても。

フランは不意に心の中で呟いた。  
だつたら……

「妖精語……死ぬの？」

「妖精語……それはない。あいつらが自分から進んで魔力の生産者を殺す事はないだろうし、魔力を完全に吸い取られる前に助けに行く位の能力はある」

「妖精語……じゃあ、やつてみる」

自分の存在意義を手に入れる。

フランはそれが欲しかつた。

「妖精語……即決どうも」

「妖精族の代わりに来た。」  
「いつを置いていく」

1つの黒と1つの白、そして3つの黒煙。

5つの気配に囮まれながら、フランは黒から白へと歩き始めた。

「言つておぐが、殺すような真似はしない方が良い。魔石を毎日何個か運んでやるから、その辺は心配するな」

「……何故生贊の為にそこまでする?」

一方的に話していたノノレアに反抗するかのように、白は口を開いた。

続けて、身体のあちこちから黒い煙が見え隠れしている白は、近づいてきたフランの右手を右手で取ると、小さくこう言つた。

「妖精語……殺しはしない」

右手を離し、フランが奥に進むと、ノノレアはこう返した。

「俺はあの馬鹿な一族とは違つ。寝床はここから数キロの山の中だよな？」

「何故それを？」

「下調べは済んでる。じゃあ、殺さないよう」。妖精語：12時間後ぐらいにまた会いに来る」

最後の言葉を聞いて直ぐにフランは振りかえったが、そこにノノレアはいなかつた。

代わりに白が身体を180度回転させて近づいてくる。

「妖精語：名前は？」

「妖精語：フランです」

「みんな、もう姿を隠さなくて良い」

パツと気配がハツキリとする。

辺りを見渡したフランは、周りを囲む3人と一度ずつ目を合わせた。皆、女性だつた。

「妖精語：話は聞いているかもしねれないが、フランには緊急時の魔力供給の役をやってもらつ。普段は寝床などで大人しくしていればいい」

「妖精語：はい」

皆、意外と普通の人で安心したフランは、緊張感が解けたような気がした。

だが、肩の力は抜けなかつた。

「妖精語：それと、妖精語を話せるのは私だけ。居ないときは行動を読み取つて行動するように」

「妖精語：はい」

白は3人と目を合わせると、下を向いて目を合わせて言った。

「妖精語：寝床に移動する」

寝床とはまさにその言葉だけのものだつた。

寝る為にあるような場所。

洞窟の入り口に布が何枚か敷かれているだけだつた。

「妖精語：普段は街中で過ごしている。フランも行きたい所があるなら行けばいい。ただ、逃げた場合は一族の絶滅を行う。もちろん、フランも」

ついでにあの男も殺されるだろ？と心の中でふと思つたフランは、コクリと頷く。

巻き込みたくない。

そんな何時もの考えが浮かんできたのだ。

「妖精語：あの…名前は？」

答えは直ぐに返ってきた。

当然のように。

「妖精語：名前なんてない。分かるように呼べばいい」

「妖精語：……はい」

ポツッと小さな足音を立てて、一人が前に出た。

「出掛ける。帰りは夜になる」

突如その場から姿を消した1人に続いて、何も言わずにもう1人が消える。

昨日の狩りをまたするかと思うと、フランの中に止めたいという気持ちが沸々と湧きってきた。

「妖精語：私も出る。日が沈むまでにはここに帰るよ！」

「妖精語：はい」

すると、白も何処かに消えていつてしまつた。  
残つたのは2人だけ。

フランは妙に気まずい雰囲気の中、その一人に近づいてみる。

妖精語は分からないと言われた。

だからフランは…

「…」

その女はゆっくりと頭を動かし、フランを見つめたが何も言おうとはしない。

ただただ見つめていた。

「よろしく、願います」

「…………」

無言の返事は変わらず続けられている。

訊いてみたい事は山ほどあつたが、言葉がまだ未熟なフランは大人しく引き下がつた。

すると、女はコツコツと歩いて洞窟の入り口に近づいていく。田の当たる当たらないの境界で足を止めると、そのままピクリとも動かなくなつた。

まるで、石像のように。

その空氣に耐え切れなくなつたフランは、好奇心のせいか洞窟の奥に向かつて歩き出した。

入り口を寝床にしても大丈夫なのだから、安全だろうと予測したのだ。

だが、その直後に、ゴンッと何かに頭をぶつける。

それは、触る事は出来るが、見る事は出来ない壁。

単純な防衛魔術のシールドだった。

ふつと頭だけ振り返ると、入り口に立っていた女の頭だけが後ろを向く。

表情は一切変わつていなかつたが、

「入るな」

と言つてゐるような気がしたフランは、身体も振り返つて来た道を戻り始める。

洞窟の全長は穴の狭まり具合から判断して約20m。

一番奥は光が無いせいで良く見えないが、何があるのは間違いないとフランは確信した。

詮索したい気持ちはあるが、フランは自分に言い聞かせてその気持ちを抑える。

「巻き込まない」と言つて。

「なるほど、あいつが……」

ノノレアは双眼鏡を通してイスとリース、シーナを見つめていた。無論、魔術で倍率は異様なまでに大きくしている。

双眼鏡は単なる形の一部だった。  
実際は無くともできる。

パサツ…

不意に木の葉が揺れた。

そのせいで魔術の倍率は1に戻り、双眼鏡本来の倍率が目に入る。双眼鏡を転送して後ろを向くと、何かの虫が丁度目の前を通り過ぎた。

「はあ……まあ顔は把握できたから、良しとするか」

ノノレアが使っていた魔術は異常なまでに集中力を要した。

別に、人より魔力がイメージに反応しないという訳ではない。

独り言を呟いてから木の枝から降りると、フランの頭の中を少し思い出してみる。

「1、2……1、2、3、4……男2の女4。内、実力があるのは  
2人程度か」

相手の記憶を探る術。

禁術ではないが嫌われる術には入る魔術だった。

本来なら相手に気付かれてしまうが、意識を失っている者は別。  
ノノレアはそれを利用して、イスたちを探しだしたのだ。  
単なる興味本位で。

「さて、魔力集めにでも行くか」

## H SandAS... 1 (イス)

「んつ……」

サア……サア……と草が波打つ音が聞こえる。

風がその音を一層強めると、着ていた服が少しめぐり上がった。

バツと起き上がると、イスはすぐさま鞘に入った剣を握る。

寝ぼけた目を無理矢理起こし、サツサツと周囲を確認。

だが、そこには延々と続く空と緑しかなかった。

鞘を握っていた左手を頭に当てる、手櫛で髪を撫でながら思つ。

「何してたつけなあ……」

下唇を噛み、イスはもう一度辺りを見渡した。

だがやはり、何もな

「……や……」

バツとその声がした方向に振り向くと、イスは徐々に歩みを速め、数秒後には全力疾走となつた。

だが、妙にスピードがでない。

「つち！」

思うように動かない足に思わず舌打ちをするが、足はまるで他人の物ものように動き続ける。

「やめてー、きやつーー！」

声が近い。

途端、ザザザツと砂をえぐりつて足を止めると、崖の下で銀色の塊が蠢くのが目に入った。

その中の一つが何かに覆いかぶさり、刃を立てている。

イスは迷わず崖の下に降りようとほぼ水平にジャンプした。

「えつ……」

だが、その足は直ぐ下の斜面を蹴り、イスは地面と向かい合つてひみつひみつと斜面を駆けだした。

想像通りにならなかつたのだ。

斜面を一気に駆け下りると、地面との距離が約2mほどの所で、イスは身体を丸める。

前転をしながら地面に身体をぶつけると、イスは前転を利用して直ぐに立ち上がり、鞘から剣を取り出した。

ダツダツダツと足音を立てながら銀色の塊に近づくと、ふっと刃を立てていた一体が顔とは呼べない顔を上げる。

その胴体部分と思われる部分に刃を水平に振つて弾き飛ばすと、驚きの顔を向ける少女の左腕を掴んで無理矢理起こす。

「あっ、ありがと」

「言葉が理解できるつてことは、AEか地球だよな」

そんな独り言を浮かべながら、イスは目の前に迫る銀色の塊たちを刃で弾き飛ばし、攻撃のチャンスをうかがう。

「エ、エーイー？」

「後にして集中しろ」

弾き飛ばす動きに入つた両腕を身体に寄せ、刃を塊のど真ん中に向けて突き出す。

金属を切つて刃が進むと、爆発音を上げながら塊は串刺しどなつた。右に振りおろしてその塊を地に叩きつけると、2匹目を狙う。だが次は飛ばず、塊たちは4本足を器用に使いながら崖の奥に消えて行つた。

一応一段落ついたので、イスは刃をしまつて少女に目を向ける。

「何だ。今の？」

「えつ？……」

どうやら、とんでもない質問をしたらしい。

答えてくれそうにもないのに、イスは新たな質問を提示した。

「1人か？」

「……ううん。移動してる仲間とはぐれたの。両断する形で無人兵が上から下りてきたから……」

無人兵。

聞きなれない言葉だつた。

だが、イスはとりあえずさつきの妙な機械だと結論付け、話を進める。

「じゃあ合流する必要があるんじゃないかな？」

「うん。でも、1人で行けるから」

「随分説得力のない事を言つてくれるな」

気付かれないように服を一通り確認してみたが、明らかに自分の着ているような服とは違う。

全体を布などで作り上げるのではなく、所々に金属を入れている。鎧と服を合成させたようなものだつた。

「さつきのは運が悪かっただけ。それに、もうすぐそこだし」

「…分かつた。じゃあ、手助けはしない。だけど、後ろからついていく

「大丈夫だつて言つてるでしょ？」

「そう言つて意味じゃなかつた。」

「生憎、迷子でな。少しでも情報が欲しい」

「その歳で迷子とか…笑えないよ」

「

街に着くと、少女は手を振りながら街の入り口の直ぐそばに有った家の中に入つて行つた。

イスはそれを見送つた後、あてもなく歩き始める。

街に着くまでに気付く事がいくつかあつた。

まず、無人兵。

次に、AEにも地球にも居なかつた生物。

最後に、異様な建築物。

この街は、数本の巨大な支柱の上に作られたような形をしており、地面はその支柱を介してしか触れていなかつた。

勿論、イスたちが街に入ってきた時に使つた橋も地面と触れていたが、その橋はもう上がつていて、

少なくともA Eにはない建造物だつた。

街をどんどん進んでいくと、露店だらけの広場に出た。

そこには機械と呼べるようなものは殆どなく、人々は皆、昔のよくな生活をしていた。

さらによく見ると、使つてゐる硬貨や売つてゐる食料品などもA Eとは違つた。

まるで異世界を旅行してゐる気分になつたが、明らかに言葉は通じてゐる。

妙な矛盾だつた。

イスは、とりあえずベンチに座り、行き交う人々をただただ茫然と眺め始めた。

日が暮れ、露店の多くが閉じられると、外灯がポツと光を放ち始めた。

その外灯の下に有るベンチに堂々と座つてゐる自分が、何となく絵になるなと思いつつ、イスは目を閉じる。

すると、「あれ?」という声が右後ろの方から聞こえた。

イスは目を開けて首を捻る。

「結局まだ迷子?」

迷子というよりは異世界人だつた。

明らかにこの世界は自分の世界とは違つていた。

だが、そんな事を言つても勿論信用してくれないと分かつていてイスは、口を大きめに開けてから言つた。

「ああ。迷子」

「ご飯食べた?」

聞かなくても分かるだろ。

と、心の中で呟きながら、イスはポケットに入つたままだつた硬貨を取り出す。

それをベンチの肘かけの上に置くと、イスは捻つた首を元に戻した。コツコツコツと軽い足音を立てながらベンチに近づき、その硬貨を

ジックと見つめた少女は、本の中のイラストを思い出していった。

「……えつ？……拾ったの？」

異世界だという事が殆ど確定した瞬間だつた。

リアルな言葉よりも信用性のあるもの何て無かつたからだ。

「なあ。今何年？」

少女は妙な質問に戸惑いながらも答える。

「2165年だけど……頭でも打つたの？」

イスが居た時間から約60年。

地球の時間にして約50年が過ぎていた。

「寝過ごしたみたいだ」

「ちょっと借りるわ」

少女の家に案内されたイスは、田に付いた本をとりあえず手に取つてみる。

そして、タイトルを読んでは本をしまい、別の本を手に取る。

「ろくな本は無いよ？」

「らしいな」

ムツとした目つきでイスを睨むと、少女は温めなおした夕飯をテーブルに置く。

本棚にあつた本はどれも物語ばかりで、イスの目的とは正反対だった。

歴史……とにかくそれが知りたかったのだ。

「余り物だけど」

今の気持ちをたっぷり詰め込みながらそつそつと、少女は食器を並べた反対側に座る。

イスは本をしまつてからテーブルの方に振り向き、思わずこいつつた。

「食物は変化なしか

「……」

何の事を言つているのかサッパリだつた少女は、直ぐに問いたいと  
いう気持ちがあつたが、自分が勝手に作り出した雰囲気のせいでも  
ても言えない。

椅子を引いてその上に座ると、イスはスプーンを手に取つた。

「悪いな。迷惑掛けて」

「ホント。早く帰つてもらいたい

「じゃあその前に一つ」

イスはスプーンを置くと、少女をジッと見つめた。

心の中まで見られてしまつ。そうな田に圧倒され、少女は思わず言つ。

「な、なに？」

イスはとりあえず６〇を足して、いつの間にか

「周辺に７０代の老兵は居ないか？元兵士でも構わない」

少女はイスが真剣な顔をしてそんな事を言うので、思わず噴き出してしまった。

自分が作った雰囲気など忘れ、笑みをこぼしながら少女はこう返す。  
「本気で訊いてる？４０代でも珍しいのに、７０代何て居る訳ないでしょ？」

逆算し、イスは下脣を噛む。

20年近く戦争が続いたのか……と、思いながら。

「ねえ。あなた一体」「

ダアアアン…

突如、遠方で何かの爆発音が鳴り響いた。

「な、何？」

少女が思わずそう言つた、遅い警報音が耳を劈き始める。  
そして、スプーンが床に落ちた。

黒い腕を持つその巨体は、ゆっくりと銀色の足を上げて瓦礫の中に足を入れる。

そして、ゆっくりと黒い腕を上げ、先端で刃を光らせた。  
イスは刃を抜くと同時に右にサッと横跳びをし、それと同時に振り下ろされた刃を防ぐ。

巨体の肩には、白い太線の両側を赤い太線が覆う長方形のマークが印刷されていた。

「おい、早く逃げろ

頭を両手で覆っていた少女は、恐る恐る頭を上げて目の前に広がる光景を見る。

3mはあると思われる巨体と向き合ひ八年。

月明かりが差し込む食卓。

そして、対岸に広がる銃口。

少年がふつと身体を屈めたと思うと、足と腕の力だけで刃を押し戻し、刃が離れた瞬間に押し戻した刃を叩き斬る。

ふつと後ろに跳ねて手を握られると、次の瞬間には走り出していた。イスは身体に走る違和感を抑えながら走る。

シールドを張つたつもりだったが、まるで空気を斬るかのようにシールドが破られ、力を込めたはずの四肢もあっさりと力を放散してしまった。

明らかに身体の中で異変が起きている。

そう感じながら、イスは目の前に迫る無人兵を回避する為に路地の中に入った。

一瞬目に入つた赤と白のマーク。

それは、明らかに地球のマークだった。

つまりそれが意味するのは…

「ちょ、ちょっと！」

掴んでいた手が解け、2人は向き合つた。

「な、何であんな事が出来るの？」

その声は怯えと驚きが混じつたような声だった。

イスは適当に思い当たることの中から一つを選び、こう言った。

「魔力で筋力を瞬間に強めただけだ。気にするな」

「強めたって…そんな魔術この世界には…」

60年経つた今、魔術の根本すらも変わつてしまつたらしい。

そんな事を思いながら、イスは左手の親指を立てて背後を差した。

「倒さないと行けないんじゃないのか？話は後だ」

「防衛隊長！」

少女は全力で走りながらそう言い、仲間たちの背後についた。

「シェルンか！そいつは？」

狙撃銃を構えると早速一発目を放ち、無人兵の足を砕く。

シェルンの脇に遅れて入ると、イスはこう言った。

「気にしてる場合じゃないんじゃないか？」

狙撃銃を構えてトリガーを3度引くと、無人兵が橋から落ちて水しぶきを上げる。

街は7つの区画に分かれており、6つの区画の中央にこの防衛区画があつた。

区画同士を繋ぐのは一本の橋だけで、防衛区画には6つの橋がある。ついている。

その一つにイス達は居た。

「すごい…」

と、シェルンが言つが、イスは首を横に振る。

何時もなら弾道修正を魔術で行つ為、一撃で仕留める事が出来た。魔術が思つてているよりも働かない。

2発無駄にしたと思いつつ、イスはさうにトリガーを引く。  
ダダダンッ…ダダダンッ…

狙撃銃ではあり得ないような連射をするイスを見て、周りの防衛隊員は唖然。

手を止める暇ができてしまうほどだった。

それに気付き、イスは思わず言つ。

「他の橋の援護に行つてもらつて構わない」

「そうか。見知らぬ者、感謝する」

そう言うと数人ほどの防衛隊員に指示し、隊長はバリケードから離れて行つた。

残つたのはシェルンと呼ばれた少女だけ。

「無人機の膨らんでる部分を狙え。そこに機械の脳がある」

少女にそう言つと、イスは狙撃銃を背負つてバリケードを飛び越えた。

屈んでいたシェルンは慌てて立ち上がり、狙撃銃を構える。

「何処行くの！？」

「弾が無駄だ。直接叩く」

「あ、危ないって！」

イスは既に確信していた。

魔力が封じられていると…

使用可能量、思考反応速度、反応具現化力、どれをとっても劣つている。

魔力に頼つて戦闘を続けていたイスの体では、シェルンの言うとおりだつた。

「援護してくれ」

そう言うと、イスは他人の足で走り出した。

シェルンの忠告を無視して。

無人兵の装甲を十分に叩き斬る力が無い今、倒す手段は限られている。

それは一本ずつ手足を斬るのではなく、中枢を狙うだけの事。

橋の中間部まで来ていた無人兵の部隊の中に足を踏み入れると、無人兵の股の間を通り抜けて踵を返す。

足に若干の魔力を使つてふつと飛び上ると、刃を胴体のど真ん中に突き刺す。

何時もならサックリ斬れる薄い装甲は、全力を込めてやつと刃が通つた。

刃をすぐさま抜き、後ろから迫る雑魚の上に飛び降りる。

すると今度は体重を掛けながら刃を突き刺し、抜くと同時に残りの雑魚と距離を取るために後ろに飛んだ。

直後に飛び掛つて来た無人兵のど真ん中に刃を突き刺すと、それを右に振つて薙ぎ払い、元気な一匹を巻き込ませて橋の下に落とした。イスは続けて迫る2機の中型無人機と目を合わせた氣になると、サツと後ろに下がつて刃を構える。

中型無人機がそれを認識したのか、左腕を前に出して縦に腕を広げた。

その腕から飛び出してくる銃口が目に入つた瞬間、無人機はガクンッと足を折り曲げながら後ろに倒れる。

「勝手な事言わないで！」

バリケードを飛び越えて橋の4分の3ほど進んだ所に居たシェルンは、そう言って2体目に銃口を向ける。

イスは1体目の上に飛び乗ると、刃を雑魚と同様に突き刺して電気の根を止めた。

続けてシェルンの射撃で倒された2体目に飛び乗ると、1体目と同様に根を止める。

「どうも」

「肩が外れたら責任とつてよ！」

シェルンが持っていたライフルは先ほどのとは違い、ズッシリとした感触が伝わってきた。

反動が余程大きいのか、シェルンは歯をギッチリと食いしばっている。

骨を砕きそつなくらい。

「だつたら援護するな」

「だから勝手な事言わないで！」

「勝手つてなあ……」

次の敵に備えながらそう言つと、イスは妙な既視感に襲われた。

前にも何処かで、同じような台詞を言つた。

そんな既視感。

だがそれは果てしなく曖昧で、夢で見た事を勘違いするよりも薄かつた。

「カルク！ エオ！」

ふつと我を取り戻し、シェルンの声の先を見る。

無人兵を5つ6つ超えた先。

そこに2人の男女が立っていた。

「シェルン！ 今行く！」

男の方がそう言つと、女は後方の無人兵に向かつて一発放つ。数は20から30。

橋の上に居る数機を相手にしている余裕はないように見える。

「第二波でも来たか。さつさと倒さないと押し切られるな…」

「ぼーっとしてないで！」

「はいはい」

イスは目の前で構えていた刃を右下に移動させ、近づいてくる人型の無人兵に合わせるように走り出す。

無人兵の左腕が上がるごと、イスはタイミングをずらす為に速度を上げ、無人兵を誘つた。

無人兵は攻撃範囲に入るタイミングを計算し直したのか、すぐさま腕を振り下ろす。

直後、イスは刃の重心を動かさずに右に移動し、左下の刃で無人兵の左足を切り裂いた。

攻撃範囲の死角を突いたイスは身を返し、無人兵の胴体に刃を突き刺す。

「左いくよ！」

イスは刃を抜いて迫る人型の2機に身体を向ける。

シェルンの合図に従い、イスは左に向かつて走りながら刃を右下に移動させる。

2機との距離が5mほどになつた所で左の無人兵の右足がライフルによつて砕かれると、イスは先ほどと同様に右に移動し、左下の刃で右の無人兵の右足を切り裂きながら股を抜ける。

そして直ぐに身を返すと、左の無人兵の胴体に刃を突き刺し、抜いたと同時に再び身を返しながら勢いを殺さずに右の無人兵の胴体を切り裂いた。

「目の前！」

残る無人兵は目の前の1機と後方で左右に分かれる2機。

その2機は既に攻撃態勢に入つているのか、4本足で自らを固定し、砲身をイス達に向けていた。

形としては蜘蛛。

「右後ろの中心を狙え！」

そう指示すると、イスは刃を右下に構え、目の前に迫る無人兵に向

かつて走り出した。

直後、後方の無人兵の砲身が青白く光り出す。

目の前の人型の無人兵が両腕を上げ、手に付いたハサミ型の刃の口を開ける。

それが振り下ろされる前に速度を上げて右足を切り裂くと、ほぼ同時に後方右の無人兵が吹き飛んだ。

そして、イスに向かって無人兵の弾丸が真っ直ぐ飛ぶ。地面を蹴つて飛び込む形で右に避けると、その弾丸は右足を無くして倒れこんでいた無人兵の胴体に直撃。

残った無人兵が2発目を発射しようとしているのを確認したシェルンは、すぐさま左にずれてライフルを構える。だがその直後に無人兵の胴体に刃が突き刺さり、青白い光がふーっと消えていった。

イスが刃を投げて殺したのだ。

次の敵に備えるために、シェルンは銃口を下げてイスに近づいていく。イスはすぐさま刃を回収し、カルクとエオと呼ばれる2人に近づいた。

「お土産どうも」

「助かります！」

男がそう言つと、シェルンが突如叫んだ。

「みんな後ろ！」

女以外がサッと振りかえると、目の中に巨大な青い無人兵が飛び込んできた。

人型で、宙に浮いている。

「な、何だこいつ！今までの2、3倍はあるよ！」

「見れば分かる」

男にそう言つと、イスはゆっくりと巨大な人型無人兵に近づく。

「受け取つて」

ふつとイスは夜空を見た。

白い何か。

それが落ちてくるのを感じて。持っていた剣を左手で逆手の状態で持つと、落ちてきたそれを腕を水平に降つて握り取つた。

真っ白な剣。

刃のようなものは付いていないが、形状は剣だ。

「どこから…」

「空から」

イスは男に向かつてそう言つと、左手に握つた剣と右手に持つた剣を構えた。

「その剣で戦うんですか？」

「斬れなければ捨てる」

銃口を向けたままシェルンが巨大人型無人兵の横を通り過ぎると、3人の中に入つた。

わざわざ囮まれに来たのかとイスが呆れて後ろを見ると、何故か無人兵の動きが止まつていてる。

警戒していた女の銃口も、今は巨大人型無人兵に向けられている。

「イスだ。互いに指示がしやすいように名前を言え」

「カルクです」

男がそう言つと、女が間を空けずに言つた。

「エオメリ」

自己紹介が終わると、察知したのか巨大人型無人兵がゆっくりと橋の上に降りてきた。

「狙撃と近接で挟むぞ」

「はい！」

「分かった！」

カルクとシェルンがそう言つと、エオメリが突如前に出る。

そして、何も言わずにカルクがそれに続いた。

「じゃあ行くか

## VWO…3（イス・ライ・フレア）

「あの大事件はほんと悲惨だった」  
ライという男は坦々と語り始める。  
チップ片手に。

「まず第一の振り落とし。3日以内に課題をクリアできない奴はみんな死んだ。あれで数万人は逝つただろうな」  
実際にはログインしていた24%が神経回路を奪われて死んだ。  
神経回路を取り戻したのは1%にも満たないと言われている。

「次の振り落としは第一の強化版。20人1組で1人1人に課題がまた出された。内容は……」

急に口を閉じたかと思うと、「よしつ！」と言つてチップをわんさか受け取る。

だが、口調が変わったのはその時だけだった。  
「簡単なものは、1週間以内にフラグポイント全て通過とかだったが、難しいのは幾らでも有った」

「あなたの条件は？」

ジッと見つめていたフレアは、ルーレットの台を挟んでライと向かい合っていた。

ライが7番に置いたのを見て、そのチップを8番にぎらしながらそう言つと、ライは「へー」と言つてから答える。

「カラーレッドのナンバー9の条件達成。ちなみにそのプレイヤーの条件は5人以上の殺害だ」

ライは生き残っている。

その事から考えて、ライとレッドナンバー9は5人を最低でも殺害したことになる。

その重みは……

「4人目が終わったかと思えば…俺が狙われた。あの時は人間不信に成り掛けたな…」

その直後、ライは大きな笑みを浮かべる。

「お前は予言者か…全部やるよ」

チップを受け取ると、フレアは早速換金して自分のウインドウの中に収めた。

新たなチップを作ると、ライはまた7番に置く。

「まあ、そいつが今の俺の艦長だ。変な巡り合わせて奴かなあ  
7番に置いたチップをリズリットが1番、2番、4番、5番の間に  
置くと、ライは「お前もか」と言つて、それをただただ眺める。

「今回もスタートはそれかもしれない。気を付けることだなあ」

銀色の球は、何度も弾けながら4番に収まる。

ライは笑顔で「どうぞ」と言つてリズリットに渡すと、アイテムウ  
ィンドウを閉じて歩き出した。

受け取ったリズリットは換金を済ませ、フレアと共にその後ろを歩  
く。

「もうそろそろじゃないか？お仲間さんが来るのは？」

カジノを出ると、待ち合わせ場所にイスとリースがあり、何か話し  
ているのが見えた。

ライは迷わずそのまま近づいてく。

すると、イスがライに気付き、急に話を止めて見つめ始めた。  
何かを確かめるかのように。

だが、その確認を先に済ませたのはライの方だった。

「よつ、あの時は加勢してやれなくて悪かつたな」

「…お前か…世界は狭いな」

2人だけに分かるあの時。

それが何よりの証拠だった。

「そつちは彼女か？」

リースを指をしてそつに言つと、2人はぴたり同時に言つ。

「違う」

「ハモつたな…さて、そろそろ時間が無くなる。互いのレベルだ  
けでも確認しておくれぞ」

ウインドウをサッと表示させたライは、眞に見えるよつてウインドウを回転させた。

レベルはMAXの200。

所謂、傲慢なプレイヤーだらけの層に所属するプレイヤーだ。だが、そんな面影はライにない。

イスヒリースもウインドウを表示させて回転させる。順に178、144だ。

残る2人は勿論1。

到底3人には及ばないレベルだ。

「まあ、2人は付き添いだけで上がるだらうけど、別行動つてのもありだな」

「おい。そう簡単に分散させるな。第一、まだイベントは始まつてすらないな」

「その通りでつさあー」

ライは200レベルとは思えない素振りを見せ付け、ベンチの上に座った。

そして、4人に向かつてこう言ひだす。

「恐らく、俺と178はゲームの主力になる。144は中間層の保護。初心者は新規プレイヤーの監視かな」

「まだ言うか？」

「仕方ねえだろ。全員を有効活用しねえとイベント開始から被害がどっと増える。俺たちはお遊びでここにログインしたんじゃねえんだからよ」

イスもそれには同意のようで、口を噤んだ。

だが、一番危険な2人を監視下から外すのは同意し難いらしく、唸り声を上げる。

「まあ、それはそつちに任せや。今は起きない事を願うばかりだな

…」

だが、それは呆気なく崩された。

「やあーみんな。楽しんでるカーライーこれからとつておきのゲームを始めるよー！」

その声は、あまりにも幼稚だった。

そして、誰もがあの事件を思い出せざるを得なかつた。

「んー。にしても多過ぎるなあー。今から特定のプレイヤーだけログアウトを特別にさせてあげるよ。する気が無いならNOをクリックしてねー」

ピッという音と共にライの目の前にウィンドウが表示された。

ライは迷わずクリックして消すと、鼻で笑つてから言ひ。

「恐らく、連合長、MAXレベルに送つてるんだろうな。ゲームの

変動を大きくする為に」

その考察は的確で、イスはただただ心の中で頷くばかり。

明らかな力の差だった。

「おややー？10万人ジャストにしようと思ったのになあー」

アナウンスはそんなのをお構いなしに続けられる。

「あと数百人はログアウトできるなあー。じゃーここからは早い者順で！」

そんな事をしたら：

イスはそう思いつつ、辺りを見渡す。

予測の通り、ウインドウの嵐。

勿論、そのほとんどがログアウトできていない。

喚きながらひたすらクリックを続ける者、諦めてその場に座り込む者。

多種多様という言葉がお似合いの光景だつた。

「あつという間だつたなー。じゃ、10万人揃つたから始めるよー！」

先ほどまで一心不乱にクリックしていた者たちは、そのほとんどが諦めてウインドウを閉じる。

イスはメモ帳用と録音用のウインドウを表示させ、その2つを早速使い始めた。

「どうせ説明用のウインドウが来るだろ」

ライがそう言つたが、イスは首を横に振る。

「一応だ。気にするな」

そう言つた直後に、説明が始める。

あの時のように。

「今回も前回同様、死んだら終わり。まず君たちを10人規模のチームに分けて、ゲームをしてもらつよー」

ピッピッとウインドウが次々と開き、1人1人の目の前に表示された。

イスのウインドウには「B-E-45」、ライのウインドウには「G-A-3」と、それぞれ別の文字列が表示されている。

「今からその部屋に入つてゲームをしてもらつよー。頑張つて生き残つてねー！」

ピツッと音が切れたかと思うと、フレアはコンクリートでできた部屋の中に移動していた。

フレアのウインドウに表示されていたのは「C-C-67」。つまりそれがここ。

周りには9人の男女。

皆若く、歳はさほど離れていないように見える。

「みんな移動したねー。じゃ、大ウインドウみてねー！」

ピッという電子音の後にウインドウが表示される。

それはあまりにも大きく、フレアの身の丈ほどの長さがあった。

20の目は皆それに集まり、文面を上から読んでいく。

下記のクリア条件を達成する事で、第二ゲームへの出場権を手にする事が出来る。

なお、条件を達成する為ならば、何をしても良い。

だが、配られたナンバーカードを持しないままでは条件は達成できず、ナンバーカードの交換は互いが生存していなければならぬ。制限時間はゲーム内時間で72時間とする。

ナンバー1：ナンバーカード7枚確保

ナンバー2：偶数ナンバーとナンバーカードを3回交換

ナンバー3：ナンバー8と70時間以上行動

ナンバー4：3人以上の条件未達成

ナンバー5：3人以上の殺害

ナンバー6：2人以上の条件達成

ナンバー7：他の奇数ナンバーの死亡

ナンバー8：ゲーム終了まで6人以上死亡

ナンバー9：ナンバーカード5枚破壊

ナンバー0：他のナンバー全員の負傷

フレアはアイテムウインドウを呼び出し、ナンバーカードを確認した。

その番号は…8。

他人の死を望む、もしくは他人を殺さなければいけないカード。また、ナンバー3を救うカード。

意味は色々あつた。

そんな事を考えていると、突如アナウンスが入る。

「みんなナンバーは確かめたかなー？じゃ！ゲームスタート！」

呆気ないスタートだつた。

まだ混乱が治まらない中で始まつたゲームは、静かに動き出す。

「とりあえず全員離れるか。互いの番号を知られたくないだろうしな」

一人の若い男がそう言つと、無言で同意した何人かが部屋から出でいく。

すると、その途中で1人の女が喚き声を上げた。

「ま、ま、待つてよ！本当に死ぬわけじゃないでしょー…？」これつて何かの冗談でしょー？」

歳はかなり若く、見た目だけで言えばフレアの5割ほどしかない。

「冗談じゃねえよ。過去の事件はガチで起きてんだし、さつさと受け入れて動かないと死ぬぞ」

全員の散開を提案した男がそう言つと、少女はふつと勢いを失つて、ただただコンクリートの床を見つめる。

過去の事件もこんな風だったのだろうかと思いつつ、フレアはもう一度ナンバーを確認する。

ナンバー8。

「早くナンバー3を見つけないと」と思いつつ、自分の考え方の変化に戸惑つた。

ついこの前まではこんな事考えるとは思つていなかつた…と。

ある程度のプレイヤーが出て行くと、男は続いてこんな提案をした。「さて、ここに残つたのは安全ナンバーってことだな。良かつたらナンバーを教え合わないか？」

男はそう言つてウインドウを表示させ、回転させてからアイテムウインドウの中を全て見せた。

ナンバーは…9。

条件はナンバーカード5枚の破壊。

捉え方によつては5人の殺害が必要なカード。

その心配はないだろうと判断したフレアは、男の真似をしてワインドウを表示させた。

「私は…8」

回転と共にそつと、「あつ」という声が上がつた。

その声の主は先ほどの少女。

「私、3」

そう言つてウインドウを表示、回転させると、フレアはそれを確かめてから「よろしく」と一言だけ言つた。

残るは2人。

そのうちの1人が「じゃ、じゃあ」と切り出して言つ。

「俺は2」

条件は偶数ナンバーとナンバーカードを3回交換。今このころ、満たせるのは8を持つフレアだけだ。

そして、最後の一人が言つ。

「私は0。言つておくけど殺害じゃないから」

一応安全ナンバーといふこと。

金髪長髪の女はそれをわざわざ示してからウインドウの中身を見せる。

自称ナンバー2もウインドウを見せ、ここにいる全員のナンバーの確認が済んだ。

そして、男が言つ。

「0、2、3、8、9…か…8以外は達成できそうだな」

その通りだった。

8は言いかえれば自分以外の生存者が3人でなければいけない。この5人で組んでも1人は死ぬことになる。

だが、だからと言つて8が離れれば、3に危険が及ぶ。初めから嫌なスタートだった。

フレアは「どうせ私は」と心中で呟き、いつ言つ。

「それでも良い。私はレベル1だから殺す事も出来ない。心配しないで良い」

フレアが自分のステータスウインドウを見せるとき、男はこう言つた。

「そうか。ま、俺が無理になつたら代わりに生きねば良いだけだ」

## VWO…4(フレア・ルナ)

ナンバー2のレベルは56。

ナンバー9のレベルは98。

ナンバー3のレベルは34。

ナンバー0のレベルは67。

レベルを公開した5人はとりあえず一緒に行動をしている。

「とりあえず、終盤まで待つのは0、2、3、8だな。問題は俺の9か…」

ナンバー0の条件は全員の負傷。

恐らく、これは自然に達成されるため、今は考えなくとも問題ない。

ナンバー2の条件は偶数とカードを3回交換。

偶数メンバーが居る為、焦る様な項目ではない。

ナンバー3の条件はナンバー8と70時間以上行動。

2時間以上離れない限り問題は無い為、今は心配する必要が無い。

ナンバー8の条件は6人以上の死亡。

終盤まで待ち、行動を決めるしかない為、今は除外される。

ナンバー9の条件はナンバーカード5枚の破壊。

ナンバー1との協力ができる可能性がある為、行動が必要になる。

よってナンバー9が優先される。

誰が考えてもこうなるのは分かつてていたが、9はあえてそう言った。

「4と5と7が動く。ナンバーカードはそのナンバーを狙うべき」

フレアがそう言うと、3が疑問符を2つほど出しながら言つ。

「えつ？その番号は殺害が目的じゃ…」

フレアは予測していたその質問に答える為に3の方に振り返った。

「ナンバーカードは1と2と9の交渉に使える。加えて、ナンバー1や6を手に入れれば、誤魔化してこの中に入ることもできる」

「あつ…そつか…」

9の男はそれを聞いてふつと笑い、心中で「頭は良いのか」と咳

いた。

男の頭の中には、フレアの前半までしか思い浮かんでなかつた。

条件に囚われ過ぎたと反省し、歩みを進める。

「エリアがどれぐらい大きいかは分からぬが、一度も接触しない事は無いだろうな。じゃないとゲームが成立しない」

通路は迷路のように細かく枝分かれしている。

さらに一定間隔で扉があり、その中には食糧や武器などが大量に保管されている。

勿論、隠れることだって可能。

既に接觸しているのではないかと思いつつ、フレアは前を向いて歩きだす。

そして、ふと思つた事を確かめる為に3に背を向けたまま言ひ。

「3。ナンバー カードに何か変化は？」

「えつ……特に……」

足を止め、3が横に来るといひ声を聞いた。

「一度私にカードを譲りして。もしかしたら70時間のカウントが開始されてない可能性がある」

「えつ！？」

3は悲鳴に近い驚きの声を上げ、早速トレーディングカードを表示させた。

「待つた！」

9がそれを止めるど、男は間を開けずに言ひ。

「0に渡せ。2人とも」

「……」

「えつ……？」

トレード後の逃亡の危険性。

それを9は考えていた。

「……0が逃げる危険性がある。理由が薄くとも、それを避ける必要がある。3に渡す」

「おーおー。3は一番危険だろーが」

「逃げたら…殺して」

ピタツと針が止まつた感覚が漂つ。

生存していなければ交換は出来ない。

それは譲与ができない可能性があるという事で、カードを渡した3を殺せば、8も死ぬ可能性があるといつ事だ。

それを理解した上での言葉だった。

「レベルは一番低い。直ぐに殺せるはず」

だが、それは単にリスクのあるストップバーを使うだけの事だった。何も起きなければ、賭けさえ起きない。

「な、何もしないって…」

3がそう言つと、9と0と2は肩の力が抜けたかのよつて歩き出す。トレードウインドウを表示させて、ナンバー8のカードを交換枠に移動させると、フレアは早速OKのボタンを押す。

躊躇いながらも、3もOKを押す。

すると、3の目の前に突如ウインドウが表示された。

ゲーム終了まで71時間23分 秒

条件達成まで70時間00分00秒

その70が69に変わり、針が動き始める。

「よかつた」

フレアがそう言つと、3人は足を止めて踵を返す。

「マジか？」

9がそう言つと、フレアは「クッ」と頷き、歩き出す。すると直ぐにトレードウインドウを開いたままの3が駆け寄り、フレアに言つた。

「か、カードは？」

「別に。条件は達成不能に近い。それに達成できるなら3が達成後に渡せばいい」

「…う、うん……」

2人の話し合いを見ていた〇が、突如前触れもなくメールウィンドウを開く。

そして、何かの文を打ちながら踵を再び返して歩き始めた。

「何してんだ？」

〇がそう言つと、〇はあっさり答えた。

「連合長にメール。3の条件の達成が不十分なプレイヤーがまだ多いかもしれないから、できるだけ情報を伝達させるのよ」

「なるほど。じゃ、各自知り合いにメールだな」

フレアはイスとライ、リースにメールを送った。

一瞬見たステータスウインドウの表記名を思い出して、リズリットとフレアはステータスウインドウを表示させていない為、不明。

唯一連絡の取れなかつたリズリットに間接的に情報が伝わるのを待つばかりだった。

メールを送つてから約1分後、早速ライから返信があつた。

「条件8オメデトウだな。俺は7。」

「恐らく、高レベルが殺害死亡条件になつてゐる可能性が高いから、仲間とは逸れないようにな。」

7の条件は他の奇数ナンバーの死亡。

自分で手を下す必要は若干ないが、確実に危険な番号。返す言葉を探していると、イスからのメールが入る。

「分かつた。だが、残念ながら5だ。」

「3とは接触できないだろうから、とりあえず流すだけ流す。連絡どうも」

5の条件は3人以上の殺害。

7以上に厳しい。

残るリースからのメールが来ると、フレアは思わず首を傾げそうになつた。

「ありがとう。チームに3が居たから早速済ませた。」

「8頑張つて。私は6で、3と8の補助をしてるから問題ない。」

簡単過ぎる。

レベルが高い事から考えて、8の条件は難なく達成できる上に、3も達成できる。

加えて6も達成可能。

仮に達成できなくとも、4と5の組み合わせが達成した場合にも生存の可能性はある為、一番の安全カードと言つても過言ではない。レベルに似合わないカードだった。

つまりそれは……

「低レベルの確保……」

フレアは思わずそう呟いた。

このゲームはほぼ出来レースだという意味で。

フレアは過去の事件については詳しくないが、何度も振り落とした後、長期的なダンジョン攻略をさせられたと聞いたことがあった。それは、VWO内で生活をさせるという事。

それを再現させる為には、勿論攻略側の人間が必要だが、商人や職人も必要になる。

これはその下準備。

つまり、ライが行つていた事態を考えなければならぬという事だつた。

そしてそれは、ゲームの長期化を意味している。

過去が現在となつた瞬間だつた。

「やはり異常ですね」

ゲーム開始から約15分。

艦長はVWOにログインする為の機械に様々な配線を取りつけ、頭をカラフルに飾っていた。

その配線の先には、一台のノートパソコン。

艦長はそれを見つめながらそう言つた。

「何がー？」

ルランがそう言つと、艦長は屈んでからノートパソコンのディスクトップを見せる。

「脳が異常に活動しています。通常の約100倍」「100倍？機械の故障か？」

レイがそう言つと、艦長は立ち上がってから返す。

「分かりません。とりあえず点滴の内容を変えましょう。あと、A Eの対策本部にも連絡しておきますので、それが終わり次第ブリー フィングを操縦室で行います。皆さん集合してください」「艦長はそう言つて部屋を出ていく。

「こ、こんにちは！」

年齢はレイの4分の3くらい。

その脇に立つ男はレイより少し年上。

「え、ええと、私が艦長の一ーリスです。こ、こちひは」「……リュウだ」

随分と間を置いてからそう言つと、男は画面の後ろに下がり、壁に身を預けた。

「ライさんの点滴は？」

そう言つと、男と女はほぼ同時に答える。

「変えました」

「女」

艦長は右手を肩の位置まで上げて、こう言い返した。

「有難うござります。ちなみにそれは餌ですよ」

ふつと鼻で笑うと、リュウは近くの椅子を足で引き寄せ、横顔を見せるような形で座った。

ニーリスもふつと笑い、少しだけ肩の力を抜くと、画面の中から言う。

「えっと…皆さんのお名前は？」

勿論、第一声は

「ルランだよーー！」

と、妹から始まり、続いて姉が言つ。

「セシリ亞よ」

姉妹の紹介が終わると、その関係者が口を開く。

堂々と腕を組んで。

「レイだ」

続けてリズリットの名付け親が、相反するように右手で頭を搔きながら言つ。

「リバリットです」

そして、気付けば一人の少女が、レイと同様に腕を組んで言つ。

「シーナ」

一応全員の自己紹介が終わると、艦長がこう切り出した。

2人を呼んだ意味を含めて。

「では、早速ブリーフィングに入ります。まず、現在VWOでは過去の大事件を再現するような事が起きております。この件に当たつてるのはライさん、イスさん、ニースさん、フレアさん、リズリットさんです。こちらからは手助けができませんので、今は5人に任せることしかありません。この5人の監視はシーナさんとリバリットさんに任せておりますので、現状で行動できるのは5〜6人。そして、この人数で対処しなければならない問題は1つです。それは、地球軍が新たな標的としたKE、正式名称カリックの保護です。既にA

Eの代表が話を済ませてありますので、ブリーフィングが終わり次第出発します。しかし、VWOのメンバーを乗せたままでは移動が少々危険なので、これよりこの艦をニーリスさんに預け、ライさんをこちらに搬送します。その後、残留メンバーでニーリスさんの艦に移り、KEに移動します。既に地球軍の攻撃が各所で始まっているので、戦闘の覚悟はして下さい。また、地球軍との条約は無視してもらつて結構です。この作戦が終わり次第、KEと協力して地球の配下から抜けますから」

艦長が長々と文章を読み上げると、場の雰囲気は既に変わっていた。地球から抜ける。

それは、第三次戦争の火蓋を切るのと同じだからだ。

リュウは皮肉混じりに言つ。

「また、若者だらけか」

第一次戦争、第二次戦争でAEの非人を含めた種族全ての成人は、90%以上死亡した。

特に40歳以降は酷い数値だった。

そんな過去を思い出させるようなその言葉に返す言葉は無い。「では、行動に移りましょう」

## 外伝・鬼雷の幼

魔術。

と、言えば、誰もが炎をイメージする。  
炎は攻撃魔術の基礎中の基礎。  
誰もが幼い時から使えた。

魔術は世界を大きく変えた。

資源問題、環境問題、その他多数の問題を一挙に解決。  
だが、それに相反するように増えた犯罪。  
良かつたのか、悪かつたのか…  
それは、この少年からしてみれば後者…………だった。

「あの子と遊んじゃダメって言つてるでしょ」

聞こえないように小声で怒鳴つたつもりの母親は、子の手を引き、  
そさくさと帰つて行く。

そんな母親たちを見つめながら、少年は目に涙を浮かべながら笑つた。

「よーし、今日は攻撃魔法の基礎訓練だ。全員着替えてグランドに出ろよー」「出るよー」

教師の田は、ふつと少年に向けられる。

そして、一言。

「お前は教室で自習だ」

少年は……握り拳を作つて言つ。

「はい」

こんなのは日常茶飯事だった。  
たつた一つ。

たつた一つ違うだけで…

少年は着替える友達を眺めながら、…笑った。

その笑いは、もう一人の自分の慰めだった。

もう一人の自分が何時も言う。

「あんな奴。5年も経てば殺せる」

着替え終わつた友達たちは、一齊にグランドに駆け出す。

少年など居なかつたかのようだ。

全員が教室から出るのを見届けた少年は、力任せに机を押し倒した。2度ほど床の上でバウンドした机は、中身を殆ど足元に散ばせている。

少年は……何時ものように少し経つてから捨い始めた。

「……大丈夫？」

少年の手はピタリと止まる。

算数の教科書を握つたまま。

そして、気持ちをもう一人の自分が押さえたまま、本当の自分が言う。

「……居たんだ。何やつてんだろーなあー」

その笑顔は、何時ものように苦しかつた。

苦しかつた。

頭だけ後ろに向けると、教室の後ろのドア付近に座つていた少女と目が合う。

少年の席は窓際の一一番前。

教室内で最も遠い2人は目を合わせたまま数秒間固まり、それから

少年が前を向いて言つ。

「転校生？」

「ううん。今日は具合悪くて…」

少年は少しの期待が崩された事さえにも腹を立てた。

そのせいか、口調は強くなつてしまつ。

「なんだ…」

少女が少年と同じだつたら少年は本当に笑う事が出来た。

少年にとって仲間が居ない事は、それほど辛かつた。

「ねえ」

少女は前触れなく、そう切り出した。

「何?」

強い口調は変わらない。

もう一人の自分は、何時の間にか何処かに散歩に行ってしまっていた。

「何で…嫌うのかな」

「えつ?」

急にもう一人の自分がそう言った。

散歩ではなく、トイレから帰ってきたらしい。

「別に…逃げたりしなくて…いいと思つ」

「…じゃあ

また、トイレに行つた。

「何で逃げるんだよ」

「……」

バツという音を立てながらその少女直ぐ横に瞬間移動すると、少年は手を差し出した。

「誰も…仲の良かつた友達も、優しい教師も、この街に住む人間も…誰もこの手を握らなかつた」

少年が他の子と違うところ。

それは、

「握れるか?嘘の無い本当の気持ちで」

「……」

ゆっくりと動き出した右手は、少年の右手の先を掴む。

「……」

それは、怒鳴る大人も黙る電撃。

イメージに敏感に反応し、低魔力で高火力を撃ち出す。

特別な、可哀想な魔術だった。

「お前名前は?」

「カーミュだよ。ライ君」

## KE… 1 (ルラン)

黒髪の束を2つなびかせながら、ストレッチャーと点滴スタンドを押して行く。

そのストレッチャーに乗っているのは、先ほどのリュウと同じくらいの男性。

頭には鉢巻のような円状の機械が取り付けられている。

「ニーリスさん。任せましたよ」

ピタリと足を止めた少女は、身体を少し捻って後ろを向く。

そして、

「はい。任せて下さい」

と言つて、またストレッチャーを押して行く。

その時、

ドンッ！

「うっ！」

と、ニーリスがストレッチャーをぶつけた。

身体を上下に振つてから体勢を立て直すと、軽く誤魔化し笑いを始める。

「ニーリスさんは細いですから」

艦長がそう言つと、ニーリスは苦笑いの表情のまま言つ。

「あはは……空間認識能力つて奴ですかね」

ストレッチャーはニーリスよりも横幅が広く、そのせいかニーリスはストレッチャーの両端を自動ドアの両側にぶつけた。

勿論ライは起きなかつたが、あまり好ましくない事だつた事に違ひは無い。

「凛…が笑に変わつたな」

レイがそう言つと、ニーリスはまた誤魔化し笑いをし、言葉を流す。

ニーリスが身を戻して完全に開いた自動ドアを通り過ぎると、艦長は言つた。

「では、シーナさん。リバリットさん。お願ひします」

「あ、はい」

「……」

シーナは返事をしなかつた。

ただ、睨むような眼を返しただけだった。

そして、閉まりそうになつた自動ドアの間に身を滑り込ませて、操縦室から出ていく。

「どうしたんだじょう?」

「さあ」

セシリアと艦長の会話はそれで終わり、自然とその場に居た全員が一か所に集まり始める。

「お前」

「はい?」

駆け足で近寄つてきたシーナは、名前を知りながらもそう言った。

妙な敵対心が…シーナの中にあつた。

それが何処から来るか何て分からない。

「変な真似したら殺す」

「ぶ、物騒ですね…」

その目つきは、何処か揺れていた。

対する目は、心の中まで覗きそつなくらいに真つ直ぐ。

そして、誤魔化すような笑顔。

「ふん。雑魚が増えたか」

リュウの第一声はそれだった。

「先ほど紹介したリュウさんです。何時もこいつなので気にしないで下さい」

と、艦長は言つたが、慣れが来るまでは時間が掛りそうだった。

「後々変な誤解が出来ないように言つておぐが、俺は地球出身の人族だ。殺したければ殺してみろ」

それだけ言つと、リコウは操縦室を出て暗い廊下の中に消えていく。A E人の中には極端に地球人を嫌う者がいる。

それの氣にしての言葉だった。

「艦長。試しに一戦いいか？」

レイがそう言つと、艦長は首を横に振つてから言つ。

「彼には敵いませんよ。男性陣全員もしくは女性陣全員なら勝てるかもしませんけど」

勿論の如くそれに反論するのは、最年少兼準最高齢の「私なら勝てるよ！」

ルランはビシッと拳手をして言つが、艦長はやはり首を横に振る。「そもそも今は時間がありません。皆さん格納庫に行ってRPの設定を行いましょう」

ルランは小さく頬を膨らませながら手を下げると、それをと歩いていく艦長たちを追つた。

廊下は何処までも暗かった。

隣に誰が居ても気付かないほどだ。

うつすらと見える輪郭と足音を頼りに進んでいくと、パッと目の前が開けた。

広がる光と共に数十台のRPが田に入る。

漆黒の翼を携えるRP。

その前に立つのはあの男だった。

「皆さんには、とりあえず予備機を使ってもらいます。RP経験者はいますか？」

数秒後、ふつと男が笑つた。

「翼なしでも無いのか

「悪かったな」

翼を持つ者の場合、RPは特注でないと翼装備を取りつける事が出来ない為、必然的に経験者は減る。

現に2人はしつかりとその影響を受けていた。

「リュウさん。さつさと済ませたいのでお願ひできますか？」

リュウは黒いRPの右腕装備部分のカバーを取り付けたと、近寄りながら言つた。

「ああ。男の方はお前でやれ。女はやつてやる」

「女好き」

何て事は誰一人言えなかつた。

単にそういう男に見えないといつ理由もあつたが、何より異様な圧倒感がそれを口止めしていた。

「体重と身長は？」

リュウは何も気にせずそう言つた。

それは興味が無い事をあからさまにしていた。

リュウはスリーサイズを試しに言つても、何ら変わりないような顔でじつと見つめる。

「レディにそう言つるのは失礼じゃない？」

セシリアがそう言つと、リュウはじつと見つめたまま言つ。

「何がだ？ 体重は日頃の行いの表れ。つまり自分の責任。身長は單なる個人差。気にするほうが愚だ」

「一般的な考え方を持ちなさいよ」

「一般が正しいとは限らない。八方美人に成りたいのなら別だがな」

セシリアがそれに返したのは沈黙の2文字だった。

そして、ルランが言う。

「私、125cmの23kgだったはずー」

「それはAEか？ 地球か？」

AEと地球の重力は異なる。

そのせいで、AE人が地球に行つた場合は自分の体が重く、地球人がAEに行つた場合は自分の体が軽く感じてしまう。

リュウはそれを聞いて、近くに有つたRPの右腕装備のカバーを取り外し、カタカタとキー・ボードを打ち始めた。

そして、打ち終えたのか踵を返し、ルランの両脇に手を入れて持ち上げる。

「な、何？」

と、言つてゐる間にルランの足はRPの足装備の上に降ろされる。RPは魔術による転送、もしくは瞬間移動で一瞬着脱ができるように、大の字から腕を少し下げ、足を閉じた形で固定具に固定され格納される事が多い。

ルランはその少し下がった腕装備のRPを掴んで自分の体を安定させると、リュウの返答を待つた。

本来RPは各部分を一刀両断したような形に開き、その中に自分の体を入れて装備する。

ここに乗つても意味は無いのだ。

「そのRPは万人向けだ。足を突っ込め」

リュウはそう言つと、ルランの右脛を掴んで、無理矢理RPの中に突っ込む。

すると、案外ブーツを履くような感じでRPの中に足が入つて行き、とうとう靴底に足がついた。

だが、その位置はハイヒールを履いたよりも高く、なんだかすつきりしない位置。

しかし、足の裏は水平。

普通のRPならあり得ないことだった。

普通のRPは身体に合わせて作られる為、足は最後まで入る。

それは、操縦者が違和感なく操作できるようにするためだからだ。無論、関節の位置もしつかり合つようになつていて。

そしてこのRPは、当然の如く関節の位置が合つていた。

ぐつとスカートを下に引っ張られ、ルランは一瞬バランスを崩し、直ぐに元の体勢に戻る。

「な、何？」

と、動搖しながら言つと、リュウは何もなかつたかのように言つ。「左足も入れる」

身長の差的に、RPの靴底の高さ的に、スカートの長さ的に、見えなかつたが警告という意味だった。

普通なら何を考えると言ひ返すところだが……

「『』、ごめん……」

と、ルランは返した。

ルランが左足もするすると入れていくと、リュウは右腕のRPを固定具から取り外してルランの右腕をその中に入れていく。

この腕装備も同様に指先まで入らなかつたが、手袋に入れたよう固定されていた。

RPで言う腕の位置で。

左腕も入れると、リュウは固定具の後ろに有つた腰装備と頭装備を手に持つて再び前に立つ。

そして、橈円形の腰装備の前部分を開き、数字の3のような形になると、その中にルランの身体を入れて閉じる。

ルランの腰から落ちて行きそうなスカートを持ち上げ、リュウがベルトを軽く引くと、身体とRPが完全に密着し、その位置で固定された。

続けて輪のような頭装備を同様に開いて、頭をその中に入れて閉じると、今度はベルトではなく機械自体が若干膨らんで固定された。リュウは再び背後に移動すると、ルランの翼を無理矢理広げさせる。

「な、なに？」

「翼を付ける。広げてろ」

RPの翼装備は肩を覆うような機械の背面部に翼が付いている。その為、元から翼を持つ種族は装着ができない。

若干の疑問を抱きながら翼を広げると、カチツといづ音と共に、ルランのへそから少し上、つまり肋骨の辺りから両脇の高さまでを機械で覆われ、カチツカチツと右肩と左肩も覆われた。

背面部はHの字型になつており、本当の翼を動かすのには何ら支障ない。

最後の設定か、リュウは右腕部分にあるキーボードを数回叩き、力バーを取り付けた。

そして、言つ。

「これで十分だ。若干のずれはあるが、間に合わせなら十分だ」

未経験者なら丸1日掛る設定。

プロでも新機体には2時間は掛る設定。

それをリュウはたった数分で終わらせた。

「何をしたの？」

セシリシアがそう訊くと、リュウはRPに手を当てながら言つ。

「こいつはこの戦艦と繋がってる。ただ単に戦艦内のデータからRPの設定データを引き出して設定を済ませただけだ。この戦艦には各身長、各体重のデータが揃っているからな」

つまり、この戦艦にはRPの設定データが膨大にあるという事だ。身長が100cmから180cmまで、体重が15から70まであるとすれば、組み合わせは約4500通り。

性別まで考慮すれば約9000通りのデータがある事になる。体型をパターン化していれば、その倍以上はある。

そんなデータの収集にどれほどの時間が掛つたか想像していると、リュウが言った。

「次はお前だ」

「… そうね。私は132cmの26kgよ。装着は自分でやるわ」

「潔癖症か」

「そういう事にしておいて」

妹の忘れっぽさに呆れながらRPに近づくと、早速設定が始まった。

「では、作戦の詳しい内容を説明します」

操縦室は薄暗かつた。

スクリーンの反射光のみが部屋を照らしている。

「私たちは後方のKE人の救助を行います。地球軍の制止はAE軍が担当しますので、基本的に戦闘は無い予定です。KE人の言葉は分かりませんが、AEの代表がKEの代表と話を済ませていますので、攻撃さえしなければこちらの誘導に従ってくれるはずです。なお、敵と接触した場合は応戦しても良いですが、間に合わせのRPJや対応できない可能性があるので、基本的にリュウさん以外は戦闘を回避する、もしくは防御一線で時間稼ぎをしてください」

スクリーンに表示されていたKEの地図と敵味方の三角マークが消え、新しいものが映し出される。

「担当区域はこちらです。この艦には頑張っても100人程度が限界なので、丁度この区域のみで任務が終了します」

担当区域は半径1kmほどの円。

既に集まっていると予測できるため、活動時間はかなり少ないと誰もが想像した。

「種族は？」

リュウがそう質問すると、艦長はこう答えた。

「異翼族です。翼の形状は自分の目でどうぞ」

異翼族は地球上もしくはAE上の鳥類に類を持たない翼を持つ族のことであり、正確には異翼族1つ1つに名前がある。だが、それを覚えるのは面倒な為、異翼族と総称して呼ばれる。

「では、移動しますね」

確かに、異翼族だ。  
誰もがそう思った。

翼は背中から一本ずつ独立して生えており、それが何百本か纏まつて翼の形状を作り出している。

例えるなら、地球のススキの先端を2つ合わせたような形だ。  
色は十人十色。

そして、艦に乗つて行くのは殆ど女と子供だった。

「この世界じゃ……女は戦わないらしいな」

黒いRPに身を包んだ男は、通り過ぎていく女を見ながら言った。

「単に子供の世話ができるから残されただけじゃない？今じゃAEでも地球でも女が万能よ」

セシリアがそう言つと、リュウは鼻で笑つてから言つ。

「確かに万能だ。だが、突出した部分が殆ど無い。その為、AEでも地球でもRPのランキング上位100番までは確實に男だ。これが何を意味するか分かるか？」

セシリアは間を開けずに返す。

「女が使えなくなるラインがあるってことね」

「そうとは限らないんじゃない？」

バツと乗り遅れたKEの異翼族が走り出す。

そして全員が乗り終えると、リュウが一步前に出た。

「日本人。よくここまで來たな」

白いRP。

機数は1。

「AE人。何故邪魔をする」

「笑える。植民地を増やす地球人を抑えるのは当然だ」

「何も分かっていない。アメリカやイギリス、ドイツ、フランスなどの主要国のRPに勝つためには、これは当然の事。自己防衛の一環よ」

「自己防衛という名の侵略だろうが。さっさと平和条約でも結んだらどうだ？」

「条約なんてただの約束。そんなことも知らないの？」

「じゃあAEと地球の条約もそつだな」

「そうよ。たつた今攻撃許可が下りたわ。残念だけど、A.E.は死滅するのよ。今頃、地球在住のA.E.人はどうなってるかしら」「さあな。まず自分の心配をしろ」

リュウは右腕を上げ、RP付属武器の銃口を向ける。それとほぼ同時に、艦がふつと地面から浮いた。

「雑魚どもは下がつてろ。こいつをやつてから帰還する」

「隨分な自信」

「それだけの腕がある」

リコウかそう並んで、セシリアは踵を返して浮いた搭乗口に足を乗せた。

「ルラン。行くわよ」

一えー、つまんなーい

だらうな、と心の母で咳きながら、レイも踵を返す。

「RPがなきや勝てただろうな。訓練してから出直そつ」

ルランの横まで来ると、後ろの襟を左手で掴んで引っ張り、そのまま搭乗口に乗った。

のペーナッジのようにしてやくなつた。

「大丈夫か？あのRP、ランクAのマークが付いてたぞ」  
レイがそう言つと、セシリアが返す。

# 地球の日本のアマーカ。

それはランキング5000番内の人間。

「知らなしね。彼の決めた事よ」

何時の間にか3人の背後にいた艦長はそう言った。  
手には手帳を持っている。

それを広げながら3人の前に掲げると、レイは襟から手を離して言った。

「よくここに居るな」

「彼は私の家族ですから」

「相手を見誤つたな屑」

翼は骨格を失つたかのように折れ曲がり、頬には黒いRPが乗っている。

もう一方の足は、まるで地に根付いているかのように動かず、結局一步も動かせなかつた。

落ちた薬莢は、たつた1発。

頭のRPをその一発で吹き飛ばしだけだつた。

その後は魔術で折り紙を折るようにバキバキと折られ、終了。妨害魔術も全て解除され、まるで蟻と巨人の戦いだつた。

「ま、マークなしのくせに…」

「マーク? あんなのが何の役に立つ。せいぜい夜間戦闘で自分の位置をバラすくらいだ」

リュウは自分の手の中にランギングを表すシールを転送させると、それを地面に放り投げた。

そのシールには31とプリントされていた。

番号の入ったシールはランギング100位までに与えられる物で、それを手にできるという事は、上位100人以内に入るという事。つまり、リュウはAEで31番目のRP操縦者という事だ。

「何故地球は31日まで何だろ?」

足を退けると、リュウは森に向かつて歩いていく。

その方向を真っ直ぐ進むと、AE軍の最前線がある。

それを知つていて、歩みを進めている。

31のシールを拾うと、日本人の女は引き裂こうと両手に力を込めた。

だが、どんなに歯を食いしばっても裂く事が出来ず、諦めて再び両手を地に付けた。

「親衛！後ろにつけ！」

その一言で数十機のRPがV字に編隊を作る。

「兵装3用意！…発射！」

RPの右翼から放たれた2発のミサイルは一直線に艦に向かって飛び、真正面に穴を開ける。

発射直後に散開したRPたちは、既に出撃中の敵機に気を配つており、艦長の周りには誰もいなかった。

攻撃に転じようと、翼をくつと上げた瞬間、無線が入る。

「艦長。KE人の救出99%達成です」

「残る1は？」

「死亡」もしくは未救出です

リストに乗っていた人数と若干合わない。

そう言う意味だった。

そして突如、別の無線が入る。

「艦長！こっちの前線はもう持たない！負傷者が多過ぎる…」

「第6班は帰還だ。第5班は6班の援護後に帰還。残りの班は隙を見て帰還」

「了解！」「了解」「了解です」「了解」「了解した」「了解です」

「了解！」「了解しました」

無数の2文字が飛び交うと、遙か彼方で点が一つ消えた。

それを合図に周りの点もどんどん消えていく。

「親衛は最後まで残るぞ」

艦長がそう言うと、親衛のある一人が言った。

「何故艦長は当たり前の事を言つのでしょうか？」

そして、答えるのは別のある一人。

「A、馬鹿だから」

「当たり」

無駄話の一環だが、彼女たちの手は口より動いている。

現に、艦長の目の前で4機のRPが落ちた。

だが、それらはいずれも……

「……地球の開発力は異常だな……」

「艦長。ボーとしてないで参戦して」

「ああ。そうだな。兵装5用意」

艦長がそう言つて降下を始めるど、下で戦闘中だった親衛たちが一直線状に連なり、敵艦隊に向かつて突撃を始める。

前の4機が重なり、盾を作るよつに並ぶと、後ろの6機が3人一組と4人一組を作る。

「艦長、合図よろしく」

「分かってる」

ぐんぐんと艦隊に近づいていくと、あちらこちらの主砲が向きを変え始める。

そして、当然の如く放たれた。

「加速」

と、艦長が言つと、まるで1羽の鳥のように加速し、弾丸を足跡として残す。

「一番大きいのを狙うぞ」

「了解！」

10人がまるで双子のように声を合わせてそつ言つた、

「攻撃用意！」

「はい！」

前の4人がシールドを展開し、後ろの7人が銃口を垂直にしていた長身のライフルを水平に構える。

シールドは火花を散らしながら弾かれる弾丸ではびくともせず、飛んでくるミサイルさえも防いでいた。まるで一つの艦のように。

「ポイントロック！ 発射！」

「いち！に！」

タンツと放たれた7発の弾丸は、徐々に集まりながら艦を目指して飛んでいく。

「第二弾！発射！」

「せーの！」

続いて放たれた弾丸は、銃口をボッと残り火で燃やし、7発を追うように飛んでいく。

魔術で弾丸に炎を纏わせたものだつた。

「第三弾！発射！」

「そーれ！」

第三弾はバチバチと青白い光を放つ弾丸。

一般的には難しいとされる電撃を纏つた弾丸だつた。

「第四弾！発射！」

「さん！はい！」

第四弾は第二弾と同じように残り火で銃口を燃やしたが、弾丸はその残り火を尾に引いたまま飛んでいく。

攻撃が終了したのか7人はライフルを垂直状態に戻し、4人のシールドを覆うようにシールドを開く。

計28発の弾丸は一直線に艦に向かっていき、とうとう第一波が直撃。

フロントガラスに穴があき、数発の弾丸が艦内で爆発。

直後、第二波が直撃し、艦前方は火に包まれ始めた。

弾丸が第一波と同様に破裂したのだ。

続いて、第三波が直撃すると、艦の背中から黒い煙が上がり始めた。

電撃による操縦系統の機器の損傷。

もはや艦は落ちたも同然だつた。

最後の第四波が直撃すると、艦は火薬庫に火が付いたかのように燃え上がり、爆発音を轟かせた。

そして、11機のRPがそのど真ん中に突っ込む。

すると、壁はまるでガラスのように割れ、あつという間に艦に大穴

が開いた。

踵を返した11人はすぐさま上昇して離脱。

「うつへー、何か外れ引いたー」

「全然壁なかつた……」

早速反省会を開き出した親衛たちの声を聞きながら、無線で確認を済ませた艦長が言った。

「全班帰還した。帰還するぞ」

すると、先ほどまでの息の合つた声が嘘のように思えるくらいテンションが下がった声で、

「へーい」

と、数人が呟いた。

次々とRPが消えていく中で、艦長は火の球となつた艦を見つめる。そして、呟く。

「何人死んだんだろうな」

残っていた最後の一機が、ふつと下を見てから呟つ。

「殺戮者を殺すのは正義。そう思つしかないですよ」

パツとその一機も消えると、雨が重力に逆らつて飛んでくる。

日本軍の艦はまだ數十残つており、艦長の目からは全く動搖していないように思えた。

そのせいか、自然と呟いてしまつ。

「…シユフェリットめ……」

「シユフェリット・ノーマールは殺戮者じゃない。AEのトップも誤解してるのか？」

シユフェリットはAEの大量殺人犯罪者。

と、言われている。

そのせいか、シユフェリットという単語が殺戮者を意味するよつになつてしまつた。

艦長はふつと頭を上げ、男を見つめる。

「誤解じゃない。一般的な言葉だから用いただけだ」

「それはシユフェリットに対して失礼だと思わないのか」

「…………そうだな……」

そう言つてゐる間に、雨は降り続ける。  
だが、2人の傘は壊れる事を知らなかつた。

「…………思ひ悩んでるな」

「…………心を読むな31番」

「読んではいけない。妨害魔術を使い過ぎだ」

「…………そうか…………大統領、総理、王……たるもの、民の不安を煽つ  
てはいけないからな」

「たつた100万人程度の代表だ。もつ少し気楽になれ」

「…………荷が重すぎる」

「…………なら、代わつてみるか?」

「…………奇想天外だな」

## 外伝・ルランの衝動…1（前書き）

ルランの思いつきでミステリーをやることになつたルナたち。山奥で突然の大雨に襲われ、陸の孤島となつた屋敷に集まつた者たちが殺されるという話だが、本当に大雨が降つてしまつた。うきうきするルランを後目に、ルナたちはため息交じりに演技することになつた。

勿論、犯人はくじ引きで決まつた。

## 外伝・ルランの衝動… 1

雷鳴が轟く中、ワイパーは休みなしに田の前を往復する。

「一本、道間違えたかな」

突然、不安になる様な事を言いだすリバリットを睨むが、暗くてその表情は伝わらない。

「はあー…」

と溜息をつき、ルランはおでこを窓ガラスにドンッとぶつける。だが、その頭は直ぐに窓ガラスから離れ、また窓ガラスにぶつかる。半時間ほど前からずっとこの調子だった。

舗装された道路の記憶はもう過去のものだった。

「あつ！」

ルランが突然声を上げると、リバリットは、

「ん？」

と言つて、身を乗り出す。

確認の為に車を止めると、リバリットはさりげなく身を乗り出して確認した。

暗闇の中にボウツと見える明かり。

「あ……あれじゃないかな？」

「おなか減つたー。早く行つてー」

「はいはい」

リバリットは苦笑い気味に車を再び走らせる。

その明かりが、招待状にあつた屋敷だと信じて……

駐車場には既に黒い車と白い車が停まっていた。

その2台の奥には、黒い車がさらに2台、白い車が3台、赤い車と青い車が1台ずつ停まっている。

「最後かな」

そう言いながらリバリットは空いているスペースに車を突っ込み、後部座席から傘を2本取る。

ピンク色の小さな傘をルランに渡すと、リバリットはエンジンを切ってキーを抜き、ドアを開けて外に出た。

傘を広げると、早速後部座席のドアを開けてバックを取り出す。バンッとドアの閉まる音がしたかと思うと、ルランが傘を広げてからこうつ言つた。

「おおきいー。何人暮らしかな」

「こういう屋敷は大抵1人か2人だよ。さ、行こ」

車の鍵を閉め、ルランが横に来ると、リバリットたちは肩を並べて歩き出した。

屋敷の窓にはカーテンが掛つており、中は見えなかつたが、1階のほぼすべての部屋に明かりが付いている事と、2階の部屋のいくつかに明かりが付いているのが見えた。

中に誰かいるのは、車とこの明りから判断して、間違いない。

駐車場を抜け、左に曲がると、リバリットたちの田の中に玄関の明かりが入る。

パチャパチャと足音を立てながら玄関前の階段を上ると、ルランは早速ドアを開けた。

そして、傘を閉じて中に入つて行く。

それを追うように、2つのバックを持つたリバリットも中に入ると、玄関先にバックを置いて傘を閉じる。

傘立てには、既に10本の傘が刺さっている。ピンクの小さい傘はルランの物。

他9本は先客の物だらう。

と、リバリットは心の中で呟き、靴を脱いで家の中に上がつた。ルランが入つたと思われる部屋に入ると、そこにはルラン以外に12人の人間が既にいた。

一斉に24の目が2人に向けられると、その中の1人がふつと動き出した。

「お前、主催者か？」

この中では一番歳を取つていそうな男だった。

だが、20代である事は間違いない。

半ば睨むような目つきのその男はどんどんと近づいてくる。

リバリットは若干慌てながらこう言った。

「い、いえ。僕は招待されて、この子はそのオマケっていう感じで

…

「オマケって何さーあ」

上田でリバリットを睨みながらこう言つた、男は鼻で軽く笑いながら元に居た窓際に帰つて行く。

「とりあえず、この中に主催者は居ないみたいだな。腹も減つたし、何か食うか？」

先ほどの男より少し若い男がそう言つて、氣の弱そうな女がこう返した。

「か、勝手に食べて良いんでしょうか？」この屋敷の持ち主に怒られたり、「

皆を言づ前に、夕食を提案した男が言つ。

「ここに居ね一事が悪いだる。勝手に食おうぜ」

すたすたと男が部屋から出ていくと、それを追つて2人の女が出ていく。

雰囲気からして、姉妹のように見えた。

「新入りさん。さつきのはライとルナ、二ーリスだ。で、俺はノノレア。他の奴らも自己紹介を済ませたらどうだ？」

ノノレアという男はそう言つと、持っていた本を軽く持ち上げ、顔を隠すようにしながら読書を始め出した。

自分はもう関係ないと言つているのかもしれない。

そう考えながら、リバリットは口を開く。

「えつと、僕はリバリットです。この子は…」

肩にポンッと手を乗せられると、ルランも口を開いた。

「ルランだよ！」

やたらと元気なルランの事を何人かが笑い、その中の一人が口を開く。

「セシリ亞よ。同じくオマケ」

「私はオマケじやないもん！」

と、ルランが反論すると、セシリ亞は「はいはい」と言つて流す。そして、直ぐそばに居た男が続けるように言った。

「俺はレイだ。オマケの保護者だと思つてもらつて結構」

ふふつとオマケが笑うと、首を左右に動かしてタイミングを見計らつていた男が言う。

「俺はスキル。まー、適当によろしく」

そして、先ほど夕飯反対だった女が口を2度3度開閉させてから自己紹介を始めた。

「わ、私はリズリットです。よろしくお願ひします」

何をよろしくしているのかサッパリだったが、誰もそこには突っ込まなかつた。

決まり文句程度の扱いだった。

「私はシレア」

着ている服が色違いの2人は間を開けずにそう言つ。

見る限り、单なる姉妹もしくは双子の姉妹といったところだった。残るは2人。

その2人は互いに見つめ合つて、どちらが先に言つかを視線だけで決める。

「私はリース。どうぞ」

そう言われて最後に自己紹介をしたのは、真っ先に話しかけてきた男だった。

「俺はリュウだ」

全員の自己紹介が終わると、自己紹介提案者のノノレアが本を下げる。

「じゃ、俺も飯に行こうかな」

そう言うと、真っ先にそれに賛成したのは、

「私も行くー！」

と、言ったルランだつた。

「リバ、荷物よろしくー！」

「はいはい」

人任せのルランに2度返事をすると、2人はすぐさま部屋を出でいく。

「上に部屋がある。2階は恐らく埋まつてゐるだらうから、3階を使つてくれ」

そう指示したのはリュウだつた。

持ち主でもないのに。

と、思いながらリバリットは、

「はい」

と言つて部屋を出でいく。

すると、何か言い忘れたのかリズリットが部屋から飛び出し、階段を上がつている最中のリバリットに向かつて言ひ。

「3階のシャーロイとテト、マコは使ってますので…」

「あ、はい。有難うござります」

リバリットは軽く一礼して階段を上りきると、早速アリストといづ名前の部屋が目に入った。

その部屋の右側にはベランダが見える。

リバリットはとりあえずベランダの方に行き、外を眺めてみる。どうやら上の階にもベランダがあるらしく、今、目の前にあるベランダは全く濡れてなかつた。

「あれ？」

全く…ではなかつた。

ベランダの隅を沿つような形で雨粒が落ちてゐる。

まあ、風がちょっと吹いたんだろう。

リバリットは適当にそう答えを作つて通り過ぎた。

すると、右側に下の階と上の階が見えた。

吹き抜けになつているらしく、吹き抜けを挟んで対角線上に3階への階段が見える。

リバリットは早速吹き抜けの反対側に行き、階段を上つた。

階段をどんどん上つて行き、左にカーブしている階段を上りきると、また目の前にベランダが見えた。

どうやら、この屋敷には大量のベランダがあるらしい。

そのベランダの方に数歩近付くと、右側に通路が見えた。

その通路の左側には椅子とテーブルが置かれており、談話ができるようになつていて。

右側にはパミニューという部屋がある。

使えない部屋の名前にそれが無かつたと心の中で確認し、リバリットはその通路を進んだ。

その部屋の前に立つと、左側にまたベランダが見えた。

だが、雨で完全に濡れており、外に出る気にはなれない。

リバリットは早速パミニューという部屋に入り、入り口の直ぐそばにバックを置いた。

「おつと…」

ルランのバックも置いたリバリットは、もう一度そのバックを手に取る。

ベットが一つしかなかつたのだ。

部屋を出て、リバリットは直ぐ左に有つた部屋の入り口を田指す。

通路を左右と曲がると、その部屋の入り口が見えた。

だが、その部屋にはマコという名前が付いており、既に下で説明があつたように使用中だつた。

勿論、中は見ていない。

リバリットは階段の所まで引き返し、吹き抜けの方に進んだ。

すると、右手側にカミカラという部屋が見え、リバリットは迷わずにその部屋のドアを開ける。

バックを置き、ドアを閉めると、リバリットは吹き抜けから下を眺めながら階段の方に向かった。

階段を降り、何事もなく一階まで降りると、ガヤガヤと騒がしい部屋の中に入る。

どうやら食堂兼キッチンという部屋らしく、既にその部屋に全員が集まっていた。

キッチンに立っているのはライと姉妹らしき2人。

それに、ルランだった。

「カレーに文句ある奴は居るかー？」

ライが背中を向けたままそう訊くと、誰も返事をしなかつた。皆、カレーに賛成だったのだ。

「作るの早いですね」

リバリットがそう言つと、スキルという男がテーブルに寝そべるような姿勢のまま右手を上げた。

「俺が作つておいた。早く来すぎて暇だつたからなー」

どうやらスキルという男は一番乗りでここに来ていたらしい。

温めただけのカレーとご飯をライたちが盛り付けると、ルランが早速皿を運んでテーブルの上に並べ始めた。  
しっかりスプーンも刺さつている。

次々と皿が運ばれ、全員分がそろつと、キッチンに居た4人も席に着いた。

リバリットはルランの向かい側に座り、スプーンを手に取る。

「いただきまーす！」

ルランのその一声で食事が始まり、あちらこちらで「頂きます」という声が聞こえた。

食事が終われば、この屋敷の主人が来るだろう。

皆、そう思つていた。

食事を終えて3階に上ると、リバリットはルランに部屋を教え、自分の部屋に入った。

入り口から真っ直ぐの所に窓があり、外の景色が見える。

まあ、暗闇で自分の顔ぐらいしか見えなかつたが…

ベットの上に飛び込み、ふと天井を見上げる。

「何だつたんだろうなー。あの招待状」

思わずそう呟いてしまつた。

招待状には「あなたの忘れもの有ります」と書かれてあり、住所が付録のように付いているだけだつた。

妙に気になつたりバリットは、何も思わずここに来てしまつたが「忘れものとは一体何なのだろうか」と今更思い込む。

コンツコンツ…

突然、ドアが鳴つた。

「はい」

リバリットはそう言つて起き上がり、ドアの前に立つと、ルランだろうかと思いつつドアを開けた。

だが、そこに居たのはノノレアだつた。

「ほいよ

ノノレアは早速右手に持つていた紙を一枚左手で取つて、リバリットに差し出す。

「ここの見取り図。トイレの場所をいちいち聞かれるのは面倒だからな

「有難うござります。これ、人数分あつたんですか?」

「ああ。30枚くらいあつたよ。一階の談話室にな。お連れさんはどの部屋?」

どうやら推測でこの部屋をノックしたらしい。

まあ、階段の直ぐそばを取つたから、不思議ではない。

「カミカラです。僕が」

渡しますよ。

と、言おうとしたが、ノノレアに左手で止められた。

「いいつて。俺が渡しておく。…あ、その見取り図には別館は載つてないからな。じゃ」

踵を返しながら左手を上げ、ノノレアはカミカラの方に向かつてい

く。

リバリットは見取り図を眺めながら部屋の中に戻つて行った。

1階は主に共有スペース。

2階と3階は空き部屋ばかりだった。

ふと掛け時計を見ると、時刻は10時を過ぎていた。  
もしかしたらルランは既に寝ているかもしれない。

そんな事を思いながら、リバリットは再びベットの上に飛び込んだ。

パンツ！……パンツパンツ！

妙な破裂音で目が覚める。

リバリットは何事かと思いながら起き上がり、部屋を出てみた。  
すると、マコの部屋に？がる通路から、リズリットが出てきた。  
そして、言つ。

「な、何かあつたんでしょうか？」

「分からぬなあ……でも、外からだつた気がする」

「と、とりあえず行つてみます？」「

リズリットのその誘いに肯定の返事を返そうとした瞬間。

カミカラルランが飛び出してきた。

そして、リバリットに近づきながら言つ。

「何があつたの？」

既に心の中で肯定していたリバリットは、ルランに言つ。  
「外で何かあつたかもしね。行つてみよう」「

「うん……」

眠いのか、あまり乗り気ではないらしい。

「オイオイなんだよ。安眠妨害も良いといふだぜ」

「寝るの早すぎだろ」

階段の反対側にあつた通路の方からライとノノレアが出でてきた。  
どうやら自分たちとは違う方向の部屋を取つたらしい。

「とりあえず行ってみるか？持ち主が来たのかもしれないし」

ノノレアがそう言つと、ライが「仕方ねーなー」と言いながら階段を下り始めた。

リバリットたちも階段を下りると、2階に居た他の招待客が階段を降りようと移動を始めているのが見えた。

追うような形で階段を下りると、12人の招待客と2人のオマケは次々と屋敷から出していく。

「あ、私、傘ないので…」

リズリットはそう言つて靴を履くのを止める。

「じゃー…」

リバリットはそう言つながら、ルランに目線を落とす。

「小さいけど使う?」

ルランはそう言いながらピンクの傘を差し出す。

「有難うございます。でも…」

「良いですよ。僕のがありますから」

リバリットはそう言つて傘を広げると、ルランをその中に入れた。

「有難うございます」

再びそう言つたリズリットは、小さな傘を広げて外に出る。先頭を歩いていたリュウが駐車場の方に行くと、他13人もそれに続いた。

そして、全員が駐車場に集まると、リュウが真つ先に口を開く。

「パンクしてるな…」

「そうですね」

ルナはそう言つて屈み、タイヤを見つめ出した。

「酷い…」

二ーリスがそう言つと、ライが前に出ながら言つた。  
少し焦つたような声で。

「これじゃあ帰れねーじゃん。誰がやつたんだよ」

「少なくともここに居る奴じゃないな。屋敷の持ち主がやつたんだ

「ひ

レイはそう言つて駐車場の中を進んでいく。

「そう……だよな。たく、これは何かの演出か?」

ライがそう言つた直後、皆が自分の車のタイヤを確認する為に動き出す。

リバリットたちも例外ではなかつた。

タイヤは4つとも綺麗にパンクしており、誰かの車にタイヤを集めて動かすなんて事は出来そうになかつた。

例え動かせたとしても、この雨じや少々危険だ。

「つち、予備のタイヤもやられてる」

ライはそう言つて車の後ろに付いていたタイヤを叩く。  
車の確認に行つていた招待客が戻つてくると、ノノレアが突如口を開いた。

「スキルって奴はどうした?」

その一言で、皆が辺りを見渡し始める。

だが、居ると思っていたスキルという男はいくら探してもその場にはおらず、13人の人間たちは、誰もがスキルが犯人だと思い始めた。

「たく、あの男が犯人か。中に入ろうぜ」

ライがそう言つて駐車場を抜けていくと、その後を皆が追つた。

だが、ただ一人だけがその場に留まつた。

リバリットはそれに気付き、ふつと後ろを向く。

「ノノレアさん。どうしました?」

「いや……」

何か考え方をしているようだつた。

傘も無いのによく黙つていられるな……

と、リバリットは思いつつ、追加の返答を待つ。

「……思い違いだ」

そう言つてノノレアは駆け足で玄関の方に走つて行く。

リバリットたちも玄関の方に向かうと、玄関先で1人の男がたたずんでいた。

それは、傘を持つていなかつたりュウだつた。

傘立てを見ると、濡れていない傘が一つ。  
恐らく、スキルの物だろう。

「どうぞ」

と、言いながら、ルナがタオルを差し出す。  
浴場から持つて来たものらしい。

リュウは何も言わずにそれを受け取り、ノノレアは軽く礼を言って  
から受け取った。

他の人たちとはスキルの搜索にでも動いているのだろう。  
リバリットは傘を傘立てに置き、屋敷の中に上がった。

その後…

「おい！男は集まってくれ！」

食堂から顔を出しながらライが叫んだ。  
リバリットやノノレアは、疑問符を浮かべながら食堂の方に歩き出  
した。

食堂に入った男たちは、茫然とその場にたたずんでいた。

テーブルの上には一つのカレーライスが置いてあり、そのカレーに刺さっていたと思われるスプーンをスキルが握っていた。

口から血を噴きだしながら。

椅子の上に座っていたスキルは、カレーライスの横に頭を置き、まるでそのカレーを見つめるようしながら血を噴き出していた。ルーに若干血が噴きかかっている。

「どうしたのー？」

後ろからルランが覗くと背伸びしているが、リバリットはそれを手で抑えて外に出る。

ルランとセシリアには申し訳ないが、隠しておいて後でチラ見されたら、それこそ問題だ。

リバリットは覚悟を決めて言う。

「スキルさんが……死んでます」

「えっ？」

ルランは疑問符をポンッと出すと、リバリットを押し退けて部屋の中に入つた。

当然そのルランの目にはスキルの死体が飛び込んでくる訳で…

「…………」

「子供にはきついだる。トガつてる」

リュウはそう言ってスキルに近づく。

そして、触らないように気をつけながら、首をしきりに動かして何か変な場所が無いか探し始める。

結局、女性陣もぞろぞろと中に入り、セシリアを含めた全員がスクリの死体を目の中に入れだ。

個人差はあるが、ほぼ全員が動搖しており、目を背ける者が何人かいる。

仕方ないだろ？と思いつつ、リバリットはリュウと同様にして死体の確認を始める。

すると突然、リュウがスキルの腹部の辺りを指差して小声で言つた。  
「数か所に刺し傷がある。このどれかが致命傷だろ？」  
ノノレアも2人と同様に死体を見つめ出した。

「毒殺じゃないな…」

「酷い……でも、何で？」

リュウはふっと立ち上がって言つ。

「さあな。とりあえずここは封鎖しよう。下手に触るなよ」

パシャ…

突然、シャッター音がした。

その主は…

「一応な」

ノノレアはそう言って携帯電話をしまづ。

その携帯電話を見て思い出したのか、リズリットが声を上げた。  
「け、警察に連絡した方が…」

「無理だ。圏外」

ノノレアは携帯電話を再び取り出して画面を見せながら言つて、女性陣の間を通り抜けて食堂から出て行つた。

「ちょっと待てよ…車のパンクはここに居る奴じゃない。だとしたら…」

ライがそう言つと、リュウは女性陣の間を通り抜けながら言つ。

「持ち主、もしくはまだ来てない招待客ってことだ」

リュウが外に出ると、続くようにしてシレアとシーナ、リースが部屋から出て行く。

関わりたくないという事だらう。

「と、とりあえず、鍵を探しませんか？」

リバリットは残っていた招待客たちにそう言つと、ライが直ぐにこう返した。

「鍵は一階の談話室にある。持つてくる」

だが、その言葉にルナが直ぐ反論をした。

「食堂はキッチンと？がつています。キッチンも封鎖するとなれば、食事はどうするんですか？」

「…………やうだな…………じゃあ布みたいなものでも掛けておくか」ライは素直に反論を受け止め、テーブルに敷いてあつたシーツを手に取る。

スキルを覆つよつに真つ白なシーツを被せるとライは直ぐに部屋を出て行つた。

続くようにルナと一ーリスも出ていく。

「いぐぞ」

「ええ」

レイがセシリ亞にそづ言つて誘つと、セシリ亞はふつと踵を返して部屋を出て行つた。

残つているのはリズリットとリバリット、ルランだけだった。しばらくの沈黙の後、堪えかねたのかリズリットも口を開く。

「私も……失礼します」

リズリットが逃げるような足取りで部屋を出ていくと、2人に沈黙は訪れなかつた。

「一体誰が……」

「分からぬ。けど、一応写真をとつておこう」

シーツを取り、リバリットは携帯電話を取り出した。

パシャパシャと腹部や頭部を保存していくと、数歩下がつて全身が見える位置でパシャつと音を鳴らす。

その後、シーツで再び覆い、部屋の中を見渡し始めた。

「リバ。これ」

ルランの方に目線を向けると、ルランは絨毯を指差しながら「うづ言った。

「赤い絨毯のせいで分かりにくいけど、これ…血？」

正直に言つと、血の区別の方法なんて知らない。

だが、リバリットはこう言つた。

「多分そう」「う

絨毯の血痕らしきものは、テープルから離れた場所まで続いており、  
その離れた場所に大量に見られた。

「運んだってことか……」

「わざわざ？」

「う。

わざわざ。

「何か意味があるんだと思う。毒殺のように見せたのも意味が……」

勿論、その意味は分からなかつた。

だが、分かれば万事解決に持ち込めるかも知れない。

「……犯人はどうやつてここで殺したんだろう？」

「えつ？」

ルランの突然の質問の意味が分からなかつた。

単にここで刺し殺しただけだろうと思つていたからだ。

「だつて、玄関のこの人の傘は濡れてなかつたし、屋敷の中は何処も濡れてないんだよ？」

「えつ……ああ……」

と、とりあえず分かつたような素振りを見せてみるが、

「分かつてないでしょ？」

と、見事に突つ込まれてしまつた。

「犯人が外から来た部外者なら、ここにずっと前から隠れていない限り、濡れないでこの人は殺せないよ？ だつて、パンクさせるには外に出る必要があるから、何か雨具を使わないと絨毯が濡れちゃうはずだし……でも雨具はなさそuddish……」

確かにそうだ。

絨毯が濡れていないなら、犯人は雨具を使った事になる。

だが、使用した雨具は今のところ見つかっていない上に、絨毯は濡れていない。

もし仮に誰かのを使用したのなら、全員が外に出た時にバレてしまう。

音に気付いてから皆が外に出るまでの間に、数十本のタイヤを全てパンクさせて玄関に戻るのは殆ど不可能。加えて、その後にスキルを殺害するなんて……いや待て……

「先に殺してパンクさせた可能性は？」

「……じゃあ前から隠れていた？」

「いや、雨具は自分で持つていれば隠せるから、隠れていなくてもできる。でも、40本近くのタイヤをパンクさせるのは厳しいかな……」

自論が殆ど崩されたルランは、若干苛立ちながら言つた。

「もう一回見てみない？」

「……」

2つの傘が駐車場で開いている。

「やつぱり全部パンクか……」

一応全てのタイヤを確認したリバリットは、ボソッとそう呟いて辺りを見渡す。

見えるのは、屋敷と別館、それと馬鹿に大きい温室だけだった。

「ねえリバ

「何？」

ルランは無理矢理リバリットの傘を奪い取ると、こう呟つた。

「車の下に何かないかな？」

自分は濡れたくないという事だろう。

リバリットは身を屈めて車の下を覗き込む。

そして、その状態で携帯電話を取り出し、ライト機能で車の下を照らしてみる。

「何も無さそう……あれ？」  
何かを見つけた。

早速リバリットは車の下に有った何かに手を伸ばし、引っ張り出してみる。

服の多半を濡らしながらそれを足もとまで引っ張ると、2人はそれを覗き込んだ。

「これって……」

ルランがそう言つている間に、リバリットはプラグを抜いて巻き戻しボタンを押した。

1分ほど巻き戻したところで再生ボタンを押し、音量を最小まで下げる。

「再生時間は1時間……つまり、これを使えば」

パンツ！…パンツパンツ！

音はかなり小さくしたつもりだったが、2人の耳にはハッキリと聞こえた。

「1時間ずらせるし、何時パンクさせても大丈夫……ってこと?」

「気付かれなければ……大丈夫かな」

スピーカーとプレイヤー。

明らかな工作だ。

「とりあえず早く持ちかえるう。こんな所を見られたら疑われるかもしれないし、犯人の次の標的にされるかもしない」

これがあれば、誰だつてスキルの殺害は可能かもしれない。  
つまりそれは、招待客の無実を崩すものであり、犯人にとっては最も邪魔な物ということだ。

持つている事がバレれば、真っ先に標的にされるのは間違いないだろう。

リバリットはそう考えていたのだ。

スピーカーとプレイヤーを手に取ると、それが入っていた箱を車の下に戻す。

直後に2人は玄関に向かつて駆け出し、玄関の前に立つとドアを開けた。

怪しまれないようにゆっくりと。

傘を傘立てに戻して屋敷の中に上がると、早速階段を駆け上がる。

リバリットの部屋まで駆け続け、部屋入ると2人は直ぐそばに有つ

た椅子の上に座った。

そして、言ひ。

「どうする？」

リバリットのその問いかけに、ルランは少し迷いながらも言つた。

「どうするつて…全然知らない人たちだけど、殺人がもし続くなら止めなきや…」

だとしても、殺人の理由が分からぬ今、打つ手はないといつても過言ではない。

今できる事と言えば……

コンコンッ…

「は」

部屋の中から若い女の声が聞こえた。

ガチャ…

両手でノブを掴んだまま、リズリットがドアの隙間から2人を覗く。殺人があつた今、警戒するのは当然のことだった。

「どうも」

リバリットがそう言つと、リズリットは警戒したままこう返す。

「何か…あつたんですか？」

「いえ、もし今後もなにがあつた時の為に、皆さんの部屋の位置を確認しておこうと思つて」

「はい？」

リズリットはリバリットが何を言つているのかサッパリだった。

確認したところでどうなる?

という事だった。

リバリットは怪しまれないようにするために、こう続ける。

「悲鳴とかが聞こえた時に、真っ先に駆けつけるようにしておきたいんです」

「あ……そうですか……皆さん警戒してると想いますけど、頑張

つてください」

「はい。一応、まとまつたら持つてきますね」「有難うござります。…では」

バタン…

ドアは呆気なく閉まり、2人は少し寂しくなった。  
全部の部屋がこんな調子なのだろう…  
と、思い始めていたからだ。

2人はどんどん部屋を調べて行き、とうとう2階も終える所だった。

一応客室のような部屋には名前が付いているおり、見分けるのは簡単だつた為、意外とペースは良い。

他の部屋には書庫やら洋服部屋と名前が書いてあり、こちらは入らずとも分かるため、楽に短縮できた。

スキルの部屋と思われる2階の駐車場側の部屋も、特に変わつたところは無く、問題はない。

強いて言つなら、今、田の前に有る部屋が問題だつた。  
名前はかすれていて読めない。

ドアノブを幾ら回しても、幾ら引いても…開く事は無い。

隣の部屋のスタチューからこの部屋に通ずるドアがあつたが、それも開かない。

一階談話室に有つた鍵を使ってみたが、それでも開かない。  
所謂開かずの間だつた。

リバリットたちは「開かずの間」と見取り図に記入し、諦めて1階に下りる。

一階でも少々問題な部屋がいくつかあつた。

まず、談話室から玄関の方に向かつた所に有る部屋。

中には不気味な人形が数百体と置かれており、とても入る気にはなれなかつた。

次に、談話室から玄関の方に遠ざかる所にある部屋。中には大量の狩猟銃やボウガン、レプリカの剣が大量に置かれている。

こんなものは殺人の道具に使われてしまうだろうと思いつつ、2人はその部屋を直ぐに出た。

最後に、駐車場反対側にある浴場の隣にある部屋の中には何もなく、逆にそれが不気味だった。

中には何もなく、逆にそれが不気味だった。

この3つの中屋以外はさほど問題になる様な事に無く、2人は玄関を出て温室に向かった。

温室にやはり植物だけで特に問題になる様な事に無し  
そう思いながら温室を出ようとした時。

別館の方からだつた。

2人は迷わず駆け出し、別館の中に入る。

靴を脱いで中に上かると、アーチーたトバを全て開け、中を確かめながら別館を進む。

7つとも同じような作りで変わったところは無かった。

別館の2階に上がる。

中に有つたのは：

誰もいない...  
一

ルランはやう咳きながら、中に有つた唯一のグランドピアノに近づいた。

黒く、埃一つないピアノだつた。

「確かにここから聞こえたと思ったけど……」

リバリットもピアノに近づいていくと、ルランがピアノにセシトされていった樂譜を手に取つて言つた。

「これ……どうこう曲なんだろ?」

「えつ?」

その樂譜を覗き見る。

タイトルは…「東の王女に捧ぐ曲」

樂譜を見る限り、先ほどの音色とは違つてている。

「今の「スカーレット・レーネ」」

「えつ?」

ルランがそう言いながら後ろを向くと、部屋のドアを開けたまま佇んでいるニーリスがいた。

「今流れた曲、「スカーレット・レーネ」っていう曲です。ビアリランが?」

「どうやら、リバリットかルランのビアリランかが弾いたと思つていいらしい。

「いや、僕たちもそれを聞いて飛んできたんですけど…誰もいなくて…」

「そうですか」

そう言つと、ニーリスはスタスターと部屋の中に入つてくる。

そして、ルランの持つていた樂譜を覗き見た。

「「スカーレット・レーネ」はスキルさんの歌かもしません」「えつ?」

ニーリスは突如そう言い、驚くルランを後目に続けた。

「スキルさんの招待状。「あなたの心有ります」って書かれてました。」「スカーレット・レーネ」は2人の女性に求婚された男性の心の動きを表した曲で、最後は片方に毒殺されます」

毒殺。

たとえ毒殺でなくとも、毒殺に見せようとしている点から考えて、

さっきの曲が何かしら関わっている事は否定できない。

だとしたら、ピアノにセットされていた曲も…

「あの、楽譜の曲について何か知つてませんか？」

その質問に対し、二ーリスは少し間を開けてから、こう言った。

「……「東の王女に捧ぐ曲」は名前の通り王女に捧げられた曲。ある貧しい少年と王女の話で、2人は身分の差を乗り越えて恋をするけど、結末は貧しい少年が殺され、王女が怒り狂う。それを鎮めるために作られた曲だと聞いています」

もし使われるとしたら、殺された部分。

リバリットは聞かずにはいられなかつた。

「少年はどんな死に方を？」

「火あぶり」

ぞつとした。

もし本当に火あぶりが行われるのだとしたら、何としても避けなければならぬ。

そして、その避ける第一歩は…

「二ーリスさん。あなたの招待状には？」

二ーリスは静かに招待状を取り出し、その中身を見せながら言つた。

「「あなたの願い有ります」……ついでに言つと、ルナは「あなたの人形有ります」です」

願い。

恋の成熟を願うのなら二ーリスが次の標的になる可能性は高い。だが、他の招待客の内容も分かつていないと、断定はできない。

「有難うございます。もしかしたら狙われてるかもしけないので、気を付けて下さい」

「……はい」

二ーリスは次に弾かれると思われる曲と自分の招待状が若干一致している事を理解していたが、半信半疑のような表情を浮かべた。仕方ない。

リバリットはそう心の中で咳きながら駆けだす。

リバリットたちは屋敷の中をウロウロと歩きまわっていた。  
ノノレアが居ない……

一通り招待状の内容を確認し、今のところ「あなたの恋有ります」のレイと「あなたの女有ります」のシレアが新たに怪しい二人として拳がつた。

残るはノノレアだけなのだが、部屋にはおらず、談話室にも居なかつた。

一体何処に……

そう思いながら、リバリットは3階の中央に有る書庫のドアを開ける。

「おひ。地図できたか？」

突如掛けられた声に思わず驚き、

「あ、あれ？」

と、言ってしまう。

數十分ほど前も来たのだが、その時はノノレアはこの部屋に居なかつた。

居ると思つていなかつたリバリットは、思わず何を言つべきだったのかを忘れてしまう。

「ん? どうした?」

その一言で我を取り戻すと、リバリットは開閉を繰り返していた口を落ち着かせて言つ。

「あの、招待状の内容を教えて頂けませんか?」

「招待状?……何処に置いたかな……」

書庫に有つた本を勝手に読んでいたノノレアは、本を閉じて置き、立ち上がつた。

「確か……こここの住所と俺の名前。あと、「あなたの未来有ります」つて書かれてたかな」

未来。  
違う。

次の標的は二ーリス、レイ、シレアの誰かだ。

そう確信したリバリットは、1階から持ってきたノノレアの部屋の鍵をノノレアに差し出し、見取り図を見せた。

部屋の鍵は念のためという事で全員に配っていたのだ。

「へー。人形部屋……からの部屋と武器部屋つてのも気になるな

…」

ノノレアはそう言いつつ、自分の見取り図を取り出し、丸印をつけていく。

丸印が付けられたのは…

人形部屋、食糧室、資料室、からの部屋、武器部屋、開かずの間、開かずの間の隣に有るスタチュリー、主人部屋、洋服部屋。いずれも気になると言われば気になる様な部屋だった。

鍵を受け取ると、ノノレアは「どうも」と言って部屋から出ていく。  
「何読んでたんだろ？」

ルランはそう言ってテーブルの上に有った本を手に取る。  
その本のタイトルは…

「予告殺人」

そのタイトルを見た瞬間、2人は思った。

ノノレアも少しばかり付いているのではないかと。

二ーリス、レイ、シレアは皆2階に部屋を取っていた。

加えて、皆2人組。

確實に絞り込めるのなら見張りという手段をとれるが、今現在では殆ど不可能なため、2人で互いに守り合つという手段が一番良い。と、2人は考えていた。

駐車場を仮に西、玄関を南と考えると、二ーリスの部屋は北西、レイの部屋は東、シレアの部屋は南南東。

2人は早速動き出した。

まず、ニーリスの部屋。

1階と2階を繋ぐ2つの階段のうち、西側に有る階段の直ぐそばに有る部屋。

それがニーリスの部屋だった。

名前はランス。

早速コンコンシとノックすると、ガチャと左側からドアの開く音がした。

その部屋はルナの部屋だ。

ルナが部屋の中から顔を出すと、「何でじょつか?」と言ひ放つ。

「あ、あの…ニーリスさんは?」

「あなた方に「危ないかもしない」と言われて、今日はこいつの部屋で寝ることにしました」

「どうやら、信用は薄かつたが、行動を起こしてくれたらしい。」

「じゃあ、次は誰が来てもあつさり開けないようにして下さい」

「そうですね」

ルナはそう言ひて全開のドアを半分ほど閉める。

「見取り図だと…ベランダと?がつてますから、ベランダの方も注意してください」

リバリットがそう言ひと、「どうぞ」とルナは言ひて部屋の奥に入つて行つてしまつた。

仕方なく、リバリットはルナを追つて中に入る。

部屋の中にはベッドの上に座つていたニーリスと窓際に立つルナが居た。

そして、ルナは膨らんでいたカーテンを開ける。

「あつ…」

リバリットは思わず声を上げた。

カーテンの膨らみの原因は、まるでバリケードのように置かれた家

具たちだつたからだ。

何処からどう見ても準備万端だ。だが、一つだけ気になるところがある。

それは…

「あの、そのドアは大丈夫ですか？」

それは、二ーリスの部屋と直接？がるドアだつた。

「置く家具が無くて少々不安ですが、大丈夫だと思います」つまり、何も対処はしていない。

リバリットは思わず言つた。

「じゃあ、ベットを動かしましよう。手伝いますから」

リバリットは早速ベットの足側に手を掛ける。

ルランもそれに続いて手を掛けた。

「有難うございます」

ルナがそう言つと、二ーリスがベットから降り、2人ともベットの頭側に手を掛ける。

「せーのっ」

ふつと持ちあがつたベットを、ゆっくりと二ーリスの部屋につながるドアに移動させ、そのドアと密着させながらその場に下ろした。

「これで安心ですね」

「はい」

ルナのその言葉に何の疑問も抱かずにはう返すと、ルランが二つ言つた。

「早く他の人の所にもいかないと」

「他人の人？」

二ーリスはベットに座り直しながらそつ言つた。

「はい。絞り込めなくて…」

「そうですか……でも、ここはもう安心なので」

二ーリスのその返答に頷くと、2人は部屋から出て、ドアが閉まるのを見送つた。

ガチャつと鍵が掛る音も聞こえた。

安心した2人は、早速次の人の元に移動し始める。

レイの部屋は吹き抜けの目の前。

部屋を出て直ぐ右隣にはセシリアの部屋がある。

部屋の名前はフリア。

早速ノックすると、中から「誰だ?」と声が返ってきた。

「リバリットとルランです。ちょっと話があつて」

リバリットがそう言うと、ガチャと部屋のドアが少しだけ開いた。レイは僅か数センチの隙間から覗き見て、ルランを確認すると、部屋のドアをガバッと開ける。

子供の前では殺さないと判断したのだろう。

「何だ?」

「あの…もし次の殺人が起らるしたら、レイさんの可能性が高いと思いまして…」

「随分縁起でもない事を言うな…」

「すいません。でも、一応知らせた方が良いと思って…」

気迫に圧倒されそうになりながらそう言うと、レイは「おい」と部屋の中に向かつて言つた。

そして、出でてきたのは…

「あ…2人で既に見張り合っていたんですか?」

レイはそれをあつさり否定する。

「違う。殺人が起きた今、1人にしてはおけない。…まあ、俺が狙われてるなら話は別だが」

レイは間髪を入れずに続けた。

「本当に俺だな?」

そう強く言われると、肯定し辛い。

「あつ…えつと…3人居る中の1人つていうことで…」

「3分の1か」

犯人は既に目標を決めているのだから、そういう確立の問題ではないと思う。

と、心中で呟きながら、軽くうなづく。

「時間は？」

「それがまだ曖昧で…でも、僕は24時間の間に行われる可能性が高いと思います。特に寝ている時間は…」

「…分かった。セシリ亞。お前はしばらぐの間、そいつらの部屋で過ごせ」

「えつ？」

と、3人の声が揃う。

「わざわざこんな事を言いに来る奴は、犯人の協力者だとは考えにくい。今安全なのはこいつらの部屋だ」

確かにそうだが…

と、声に出しそうになつたが、何とか呑み込む。

「あなた達は良いのかしら？」

と、セシリ亞は訊いてきた。

リバリットとルランは迷わず頷く。

「じゃあ、しばらくの間」

セシリ亞はそう言って一步前に出る。すると、レイがバックをひとつ部屋の奥から持つてきて、ドアの目の前に置いた。

「悪いな」

「あ、いえ…」

そのバックを持ち上げると、ドアはバタンと閉じられてしまった。自分一人で何とかするという事だろう。

リバリットたちは、レイの手伝いはこれ以上できないと考え、最後の部屋に向かう事にした。

シレアの部屋は、3階に上がる階段の進行方向に有る。

部屋の入り口は2つあり、1つは階段を上る際に右側に有る談話スペースに出る入り口。

もう一つは階段を上りぎりに真っ直ぐ進み、左右と曲がったところに有る入り口。

後者の入り口の田の前に広がる部屋はシーナの部屋であり、先ほどまでの2組と同様に互いに見張るのは容易そうだった。

コンコンシヒマツノーマの部屋のドアをノックすると、中から、

「何? 誰?」

と、強い口調の返事が返ってきた。

「リバリットとルランとセシリ亞さんです。ちょっとお話があつて」そう言つてから数秒後に、ガチャッとドアが数センチ開き、シレアはこう返した。

「用があるなら言つて」

どうやら相当警戒しているらしい。

「もし、殺人が続くなら…シレアさんが危険かも知れないので、伝えにきました」

「…私?」

「は、はい」

「根拠は?」

口調は弱くなつていて、ドアはピクリとも動かない。

「別館に有つた楽譜と招待状の謎の文章に関連性が見えたからです。聞こえなかつたかもしれません、別館で無人演奏がありました。その演奏された曲の由来とスキルさんの招待状の文章が一致したので、間違ひはないと思います」

「……分かった。で、具体的な対処法は?」

どうやら信用してもらえたらしい。

わざわざ鍵を届けた意味があつたかもしれないと思いつつ、具体的な対処法を考える。

勿論、2人で見張りあうぐらいしか思いつかなかつたが…

「今日はシーナさんと一緒に寝てくれませんか? 2人の方が安全でしちゃから」

「…………」

「…………」

沈黙が訪れた。

すると、ガチャッと右後ろのドアが開き、シーナがこちらを覗き見てきた。

そして、言つ。

「姉さんに何かあつた？」

口調はやはり強い。

リバリットは身体をシーナの方に向けて言つ。

「今日の夜、もしかしたらシレアさんが狙われるかもしれないのに、伝えに来ました。勿論、殺人が続くと仮定した場合ですが……」

「そういう事は考えるべきじゃない。……と、言いたいけど…………」

シーナは部屋から出ると、リバリットたちの方に近づいてきた。

「姉さん。今日は私の部屋に泊つて

どうやら殆ど聞こえていたらしい。

もしくは直感。

「…………分かつた」

ドアを開けると、シレアはリバリットを半ば睨みながら言つた。

「他に対処法は？」

「ベットをドアの目の前に移動させるとか、寝ないで起きてるとか

……」

流石に後者は無理があるだつ。

だが、シレアはあつさつこう返す。

「分かつた」

そして、シーナが続けて言つ。

「手伝つて」

シーナの部屋には窓が無く、部屋の全方位を廊下に囲まれていた。に入つた。

シーナの部屋には2人が入るのを確認してから、リバリットたちも中入り口は2つ。

リバリットたちは早速入ってきたドアを閉め、鍵を掛けてから家具

の移動を始める。

とにかく有る物全てを入つてきたドアの方に集めると、今度はベットを反対側のドアに移動させ始めた。

両方を塞ぐという事だ。

ベットをギリギリ出入りできる位置に下ろすと、リバリットたちはドアの隙間から部屋の外に出る。

ドアを閉めると、ギギイギギイとベットが動くのを確認してから言った。

「移動できましたか？」

すると、返事は直ぐに返ってきた。

「大丈夫」

どちらの声かは分からぬが、とりあえず大丈夫らしい。リバリットは「じゃ」と言つてドアから離れていった。

一応危険と思われる3人に忠告し、有る程度の対処を行つたリバリストたちは、2階の談話スペースに集まっていた。

見張りをしようと3人で決めたのだ。

この位置からなら、レイを見張る事も二ーリスを見張る事もできる。残るシレアは階段付近を抑えているため、犯人が行こうとした時点で分かる。

ただし、リースが犯人だった場合は、談話スペースから見える範囲を移動せずに行ける為、防ぐのは厳しくなる。

だが、悲鳴を上げられれば10秒で駆けつけられる位置だ。

3人はそれぞれ3階の書庫から持つてきた本などを読み、時間を潰していた。

夜が明けるまで辛抱すれば何とかなる。

そう踏んでいたのだ。

だが、見張りを開始してから1時間ほどで2人はダウンしてしまい、実質1人で見張りをすることになつた。

予測済みだつたりバリットは、何も言わずに見張りを続ける。

「ジッ…ジッ…

誰かが3階から降りてきた。

リバリットは身構えながら、それが誰かを確かめようとジッヒと上を見る。

足が見えたかと思つと、その人間は頭をぐつと下げて談話スペースを見た。

ノノレアだ。

「見張りか？」

「ま、まあ」

「危ないな」

ジッヒと階段を下りると、ノノレアは談話スペースに入つてくる。

そして、こう言った。

「犯人に顔を見られたらどうする？ 真つ先に狙われるぞ？」

「そうですけど……」

ノノレアは向かい合ひのような形で椅子に座り、ポケットから折れ曲がった本を取り出した。

その本を開いて読み始めるが、ノノレアはこう言った。

「どの部屋を見張ってるんだ？」

「えつと、ルナさんの部屋のアス、レイさんの部屋のフリア、シナさんの部屋のヘリオです」

「どうか…で、狙われるのは？」

ノノレアは殺人が続くと予想しているらしい。

リバリットは、その質問に対しても迷わず答えた。

「ニーリスさん、レイさん、シレアさんです」

「…なるほど。なら配置ミスだな。素直にシレアとかいう奴の部屋に2人泊めておけば、片側は完全封鎖でもう片方からお前らの方に逃げれたのにな」

確かにそうだ。

リバリットもそれに気付いていたが、シレアがシーナの部屋に行くのを止める事が出来なかつた。

もしこれでシレアたちに何かあつたら…

リバリットはそう考へると、妙な不安感が湧きだしてきた。

今すぐにでも確認しに行きたい。

そう思い始めた。

「今からでも変えに行けたら良いんですけど……」

ダウンしている2人のことを考へると、この場を動きづらい。

今はこのまま続けるしかないと自分に言い聞かせた途端、ノノレアが突然立ち上がつた。

「流石に寝てるかな…まあ、ちょっと確認してくる

「あつ……」

止めようと声を上げたが、間に合わなかつた。

ノノレアは駆け足でシレアたちの方に走つて行き、消えてしまつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5107v/>

---

ReCruz-リクルス-

2011年11月15日10時28分発行